

燕王立つて
成祖となる

永樂の瓜蔓
抄

太祖の誅滅によつて有力な人物は悉く変除せられて仕舞つて居るからして燕王の進軍するに至つて道々の諸城は何れも風を望んで解散した。惠帝は又耿炳文、李景隆等を遣はして燕王を討つたが皆敗壞した。そこで燕王は進んで濟南を攻めたが鐵鉉等に擊退せられ惠帝も亦齊泰、黃子澄の二人を斥けて平和せんことを求めたけれども燕王は聞かなかつた。然も燕王は三年の間各地に轉戦して多くの城邑を占領したに拘はらず其の兵が去ると直ぐに再び朝廷の味方になつて仕舞と云ふ風であつたからして意を決して南下すると云ふことをせなかつた。然るに當時惠帝の宦官中朝廷を怨むものが多くあつて密かに使を燕王に遣つて京師の實狀を告げた。そこで燕王は大に決意して南下した。建文四年燕王の兵は江水を渡つて京師を侵し惠帝は又和を乞うたが燕王は許さないで京城は遂に陥り帝は其の終るところを知らなかつた。依つて燕王は自ら皇帝となり年號を改めて永樂と稱した。之が即ち明の成祖である。ときは我が紀元二千〇六十二年、後小松帝の時代である。初め成祖が其根據地の北平を發する

成祖の治

安南との交
渉

に當つて道衍は惠帝の臣方孝孺は現時明朝の大儒であるからして京師を攻めた場合にも之れを殺さないやうにと言つた。そこで成祖は都城に至つた場合に孝孺等を捕へ即位の詔を草せしめやうとした所が孝孺は慟哭して應じない。成祖は筆冊を授け以て詔を書かさうとしたが方孝孺は筆を地に投じて且つ哭し且つ罵つた。然も成祖は再三之れを強いたところが遂に燕賊篡位の四字を大書した。帝は大に怒つて之れを殺した。齊泰、黃子澄等も成祖に捕へられながら抗辯して屈せない。そこで皆殺されたのみならず是れ等の人物の親族や子弟等の坐死したものは頗る多かつた。世に之を永樂の瓜蔓抄と云ふのである。さて成祖の即位するや前に惠帝の爲めに國を奪はれた諸王を元の通りに復し儒學を獎勵し諸税を減免し楊士奇等の學者を機務に參與せしめ號して内閣と云つた。次いで都を燕京に遷し之れを北京順天府となし舊都の金陵をば南京と稱した。成祖は右の如く逆に天下を得たのであるが然も即位の後には明の勢威を擴張することに力を盡くした。當時安南は黎季犛と云ふ權臣が其の主の國

を奪ひ國を大虞と號して居た。彼は使を明に遣はして其の主家陳氏の血統が絶わたと言はしめた。そこで成祖は黎季犛の子を以て安南國王に封じた。然るに其の後陳氏の子孫なる天平なるものが國難を避けて老櫓に往き老櫓が之れを明に送つた。そこで成祖は之れを納れて安南王とせうとしたところが黎季犛は道で之れを殺した。成祖は大に怒つて我が紀元二千〇六十六年張輔に兵數十萬を授けて大虞を討たしめた。張輔は大虞の軍を富浪江畔に破つた。當時占城も明軍に應じて安南の南境に迫つたからして明軍は遂に黎季犛の父子を虜にし其の地に交趾布政司を置いて之れを治めさせた。然も此の交趾布政司は永くは存在せなかつた。と云ふのは安南が明の有となつて頻りに其の國俗を變じたからして安南人は之れに服せないで屢叛を計つた。成祖の末年に至つて黎利なるものが愚民を煽動して亂を起した。そこで明は宣宗のときに及んで王通なるものを遣はして之れを討つたが大敗したので遂に黎利が陳氏の後を立て、國王となさんと乞ふのを許し悉く安南に派遣して居た官吏を召還した。之

南海諸國の遠征

宣宗

れは我が紀元二千〇八十九年のことであるが其の後黎利は陳氏の血統が絶わたと奏したので宣宗は遂に黎利を立て、安南國王となし安南は之れより代々明に臣禮を取つた。之れより前成祖の即位したときには惠帝が或は海外に逃れて再舉を計るかを疑ひ我が紀元二千〇六十五年に宦官の鄭和なるものに大船六十餘艘水兵四萬餘を率ゐて普く南海諸國を遠征せしめた。鄭和は成祖仁宗宣宗の三朝に歴事して南海に遠征すること前後七回に及び琉球カンボヂヤ暹羅マラツカホルチラスマトラジャバベンガルなどの三十餘國は皆明に入貢し彼我の商賈は頻りに交通して以て貿易をなした。宦官であつて鄭和の如き功績のあつた人物は古來其の例に乏しいのである。

第三節 宦官の專横

宣宗の時代には楊榮楊溥楊士奇の三楊を始めとし名臣があつたからして天下は能く治まり時に漢王高煦の謀叛があつたけれども帝の親征に由つて直ちに之れを平げ宣德宣宗の年號の治は實に明の最も盛んな時代とな

英宗

宦官王振權を振ふ

支那の天下の亂れ易き理由

つた。宣宗崩じて英宗幼にして繼いだ然も上には張太后の賢明なるあり。大臣には楊士奇の學行を以て鳴り楊榮の明斷を以て鳴り楊溥の謹直を以て鳴るものありしに由り明の政治は依然として見るべきものがあつた。然るに英宗漸く長じ宦官の王振が權を得るに及んで朝政は次第に亂れた。元來明の太祖は歷代の宦官の害を知つて居たからして即位の初めからして之をば機務に參せしめなかつたが成祖の叛旗を擧ぐるに當つて前にも述べたやうに朝廷の宦官は之れに内應して功があつたからして其の即位以後は漸く之れに大權を委ぬるに至り折角太祖が注意した宦官の害はこゝに其の萌芽を生じた。さて王振は狡猾にして多智英宗の太子で居られたときからして常に其の左右に侍して甘心を買うて居つたから今や英宗の世となつて司禮監と云ふ榮職に就いた。之れより彼れは頻りに己れの勢威を張ることに努め屢朝臣を獄に下し爲めに朝政は大に亂れた。僅かに一王振の爲めに折角治平であつた天下が亂されるところを見る。如何にも支那の治平なるものゝ其の基礎の薄弱なことを知ることが出

宦官汪直王越の專權

宦官武宗に叛す

來る。これは勿論一つには宮中及び政府の組織の不完全なものにも由るであらうが又一つには支那歴史に所謂名臣なるものは多くは眞に雄才大略のある人物ではなくして消極的の道德家と云つて善いやうな人物のみで事に當つて所謂十分の彈力がないものゝみであつたと云ふことも大に治平の根據の薄弱なことに關係したであらう。さて王振は其の後失敗して死んだが憲宗のときに至つて宦官汪直なるもの帝の信用するところとなり王越と結托して朝廷の外に西廠を設け其の勢は朝廷の官吏をして悉く頭を垂れて服従せしむるほどであつた。然も其の專權は漸く帝の寵を失ひ西廠は閉ぢされ汪直等は貶謫せられた。其の後武宗のときに至り劉瑾等所謂八虎と稱せられた八人のものが帝の喜ぶところとなり頻りに帝を遊戯に導いたからして政治は漸く衰へ四方には盜賊が起つて天下を亂した。ときに安化王の寔録は劉瑾を誅することを名として兵を冀甘肅省に擧げた。此の亂は仇鉞が寔録を捕へたので直ぐに平いだ。のみならず八虎の一人の張永と云ふものが劉瑾と隙を生じたので此の亂の後に彼れ

震盪も亦叛す

世宗のとき内政亂れ外寇至る

を彈劾したから武宗も遂に彼れを誅し悉く其の徒黨を退けた。然も實錄の亂に踵いで寧王の震深なるもの當時朝廷は江彬等が専權の爲めに人心恟々たるを機とし兵を南昌(江西省)に擧げて叛し之れが爲めに江西は大に亂れた。當時有名なる王守仁は命を奉じて福建の叛徒を征して居たが震深の叛報を聞いて直ちに兵を運らして南昌を討ち震深を虜にした。世宗繼ぐに及びて又嚴嵩なるもの禮部尙書となつて政治を専らにし内政益亂れ邊境には頻りに倭寇の侵害があつたからして其の後嚴嵩及び其の子の世蕃等が誅に服したにも拘らず一人として北門の警と東海岸の難を防ぐものはなかつた。

第四節 瓦剌ウエーラトの盛大

前に述べたトクテムールの死後蒙古は大に亂れ統一するどころがなかつた。トクテムールの五代の孫はクリチなるもの、弑するところとなりクリチは蒙古の國號を變じて韃靼タタールと稱したが部民は之れに服せなかつた。そこでアルタイなるもの之れを殺し成吉汗家の後裔ベンヤシリなるもの

蒙古と明との交渉

マハム明に降る

をサマルカンドより迎へて王とした。時は我が紀元二千〇六十五年のことである。明の成祖はベンヤシリを招致したが應じなかつたからして怒つて邱福に命じて之れを討たせたが福はケルレン河畔に戦つて大敗した。由つて成祖は自ら五十萬の軍師を率ゐて遠征しヘルヤシリの軍をオーノル河畔に撃破した。時にウエーラトの部長マハムなるものベンヤシリを殺し其の子を擁立して權を専らにした。ところがさきにベンヤシリを迎立したところのアルタイは此のマハムと不和であつたからして遂に韃靼の餘衆を率ゐて明に降つた。ウエーラトは元蒙古の配下にあつたがチャガタイ汗國の滅亡と共に漸く獨立の勢力を得、外蒙古の西部と天山北路とを占領した。さてマハムは韃靼の敗亡に乗じて漠北を一統し其の勢を恃んで明に入寇した。由つて明の成祖は韃靼のアルタイと兵を合してウエーラトを破り逃ぐるを遂うてツーラ河畔に至つた。マハムは勢窮して遂に明に降つた。時に我が紀元二千〇七十四年である。かくの如く明は蒙古一帯の地を服屬したもの、之れより後ウエーラトと

ウエーラト
とタタール
との敵視

タタールとは敵視すること甚だしくドゴン立つてウエーラトの部長となるに及びタタールのアルタイを襲ひ殺し自ら韃靼可汗とならうとしたが部衆が聞かないので止むを得ずツツプハを立て、韃靼可汗となしたものの實際は其の命令を聞くのではなかつた。ドゴンの子エツセンは雄傑の士であつたからして父の勢を繼いで頻にウリヤンハイ及びハミミなどを掠略した。明の英宗の初年に使を遣はして入貢したが王振の取扱が悪かつたのでエツセンは大に怒り諸部の兵を發して遼東、甘肅などに入寇した。王振は英宗に勸めて親征せしめ大同に至り進んでエツセンの軍を攻めやうとしたが郭敬なるものが之れを止めたので遂に軍を班へし土木堡直隸省に次した。時に明軍は人馬共に饑渴に苦んで居つたがエツセンは之れを見抜いて急に帝の陣營を圍んだ。之れが爲めに王振等は戦死し帝はエツセンの爲めに捕へられて共に北に往いた。之れが有名なる土木堡の變である。此の戦に明軍の死傷は實に數十萬に至つたと云ふことである。時は我が紀元二千百九年。

エツセンの
侵略

土木堡の變

ウエーラト
と明との講
和

英宗去つて景帝が位に即いた。エツセンは英宗を擁して頻りに京師に迫つたが恰も善し當時は四方の援兵が來たので景帝は討つて之れを退けた。ウエーラトはツツプハが大汗であるけれども然し實際の権力はエツセンにあつてツツプハは不平に堪へない。そこで使を遣はして明に入貢した。由つてエツセンも亦明と平和せんと欲し自ら大同に至つて上皇即ち英宗を返へした。景帝が崩じて英宗が重祚した。時にエツセンとツツプハとは互に相攻め遂にエツセンはツツプハを敗死せしめ兵力を以て諸部を強迫し東はウリヤンハイを越ね西はハミミに及び自立して天元田盛可汗と稱した。之れよりエツセンは日に益狂暴を恣にしたからして民心を失ひ遂にアラの爲に殺された。間もなく韃靼部長のホラなるもの又アラを殺しツツプハの子を立て、小王子と號した。こゝに至つてウエーラトの勢力は地に落ちて韃靼の勢力次第に強大となつた。明の憲宗の時代に至つて韃靼には一英傑が出で、其の可汗となつた。其れはダヤンと稱するもので内外蒙古の諸邦を統一し明の孝宗のときにオールドス青海を略し

エツセン可
汗を自稱す

ホラ小王子
を立つ

ダヤンタタ
ールの可汗
となる

アルタン明に寇す

寧夏を陥れた。ダヤンの孫に有名なる俺荅アハダが出でた。明の世宗の時代に其の兄と共に屢大同附近に入寇したが間もなく兄は死したのでアルタン代つて其全部衆を領し明人を得て謀主となし頻りに直隸山西陝西の地を侵すもの前後二十餘年に及んだ。時に明にも曾銑周尙文などの名將が出で、善くアルタンを防いだが然も嚴嵩の爲めに阻碍されて何れも其の力を十分に伸べる事が出来なかつた。されば明の嘉靖二十九年にアルタンが大舉して京師を犯したときには諸將は之れを防ぐことが出来なかつて韃靼軍は八日間恣に内地を掠奪し以て軍を班へした。アルタンは其の後ウラエトを破つて西方に地を開き又青海の土地をも占領したが當時此の地方は喇嘛教が流行して居たからしてアルタンも其の信者となり之れより殺伐を厭ふの心を生じ最早明を侵すことなく年々明と平和的の交際をなした。されば是まで大害を受けて居つた大同より甘肅に至るまでは此の後二十餘年の間兵馬の難を免れた。

第五節 明と南境及び西陲の關係

アルタン又地を西に開

明の太祖麓川を平ぐ

英宗緬甸を征服す

前に述べた通り明の太祖の時代に南方の大理金齒などの諸蕃族を降してより明の領土は麓川部雲南省と相接することゝなつた。當時麓川の部長思倫なるものあり。明に服せないで邊境を亂したからして太祖は兵を遣はして之れを平定した。其の後英宗の時に及んで思倫の子の思任が又叛を謀つて緬甸を侵し頻りに金齒以下の近傍諸部を併呑し明の西南部は大に亂れたからして英宗は王驥等を遣はして之れを討じ遂に緬甸に侵入し思任を擒にした。之れより以後緬甸は明に服従したが當時雲南に孟養部なるものあり。其の部長は思任の子孫であるからしてさきに緬甸が明に内應して思任を擒にしたことを怨み兵を率ゐて緬甸を侵し國都アヴァーを陥れた。緬甸の王族莽瑞體は南方トングーに走り我が紀元二千二百十二年衆の擁するところとなつて其の地の會長となつた。莽瑞體は英略の資で當時南洋の航路が開けてホルチヌガル人の印度などに來るものが多かつたからして之れを雇ひて近衛兵となし頻りに四方を侵略し我が紀元二千二百十四年遂にアヴァーを恢復し尙ほ兵を進めて金沙江上流の

地を平定し雲南地方の諸蕃部を略し遂に老撾や暹羅を破つて悉く己れの屬國となした。そこで莽瑞體は勢に乗じて大舉して北に向ひ明を侵した。が兵糧が盡きたので兵を班へした。それは我が紀元二千二百三十三年である。子の莽應裏が繼ぐに及んで又大軍を發して雲南に侵入したが明の大將劉綽迎へて之れを破り追撃してアヴァアを陥れた。此の機に乗じて暹羅も亦緬甸を侵したからして緬甸の勢力は全く振はずなつた。明と南境との關係は上に述べた通りであるが翻つて西陲との關係を見るに初め元の滅亡のときに蒙古の王族のアンクテムールはハミを領して居たが明軍が河西を平定するに及んで遂に明に朝貢し其の後は明の西藩となつた。ウエーラトの勢力を得るに及んでハミは屢其の侵略に遇うて國力が衰へた。ハミの西に吐魯番と云ふ國があつてウイグル民族が之れに據つて居つた。我が紀元二千百十年の頃にアリなるもの其サルタンとなりウエーラトの衰退ハミの不振に乗じて頻りに土地を東に廣めて遂に明の邊境を侵略するに至つた。明軍は之れを討つたが功を奏せ

なかつた。我が紀元二千百六十五年の頃アリの孫マンソルなるものサルタンとなりウエーラトと共に屢河西の地を侵略したからして明は到底之れを防ぐことの困難を見遂に肅州以西の地を放棄した。其れよりウエーラトウイグルの民族は河西に蹠踞して明の西陲は安寧を得なかつた。

第六節 倭寇及び朝鮮の役

元寇以來數十年にして我が國は南北朝時代となり五十餘年の間互に矢叫び哄の聲に忙がはしかつたが正成正行の討死と共に南風終に競はず。そこで其の遺臣は或は海を越えて高麗の沿岸を侵略するものもあつた。漢史に於ては之れを稱して倭寇と云ふ。其の後九州邊の無頼の人物多く之れに加はつて倭寇の勢は益強大となり高麗は屢使を我が國に遣はして之れを禁制することを乞うたが然し我が國も如何ともすることが出来なかつた。高麗は元の東征に参加してから財政の困難を來たし加ふるに國王の廢立悉く元帝の干渉するところとなり國勢は愈衰へた。我紀元二千十二年に恭愍王位に即くに及で僧の遍照を信任して却つて大臣宿將を疎ん

倭寇と高麗

李成桂朝鮮國王なる

じたからして國內は益亂れた。倭寇は此の機に乗じて益其の沿岸を掠めた。恭愍王は親征軍を起したが却つて大敗した。當時高麗に有名なる將軍李成桂なるものあり。漸くに一時倭寇を鎮壓した。恭愍王に子がなかつたので暹照の子辛禡なるもの遺命によつて帝位に即いたが明の太祖は其の朝鮮の王統でないことを主張して封冊を許さなかつた。辛禡大に怒つて蒙古と兵を合せ遼東に侵入せうとしたからして李成桂は堅く之れを諫めたが聞かない。そこで李成桂は辛禡を廢して高麗の王族の恭讓王を迎立したが是れ又懦弱で民心を得なかつた。當時李成桂の勢は頗る盛んで民望も亦厚かつたからして遂に國民の爲めに擁立せられるところとなつた。是れが現今の朝鮮の太祖である。實に我が紀元二千〇五十二年即ち南朝の後龜山天皇の中頃に當つて居る。明の太祖は李成桂がさきに辛禡を諫めて明を侮さ、なかつたことを徳とし李成桂を封冊して朝鮮國王となした。

明と倭寇

倭寇は曾に朝鮮の沿岸を侵したのみならず明初には方國珍、張士誠等の殘

黨と相結托して頻りに支那の山東、浙江、福建などの諸省を侵略した。明の太祖は之れが爲めに使を日本に遣はして其の入寇を禁せんことを求めたが征西將軍懷良親王は書辭の無禮なるを怒つて之れを斥けた。明は更に趙秩なるものを遣はして好を通じたからして懷良親王は試みに僧の祖來を返報使として明に遣はした。明の太祖は大に喜んで僧の祖來等をして我が國の使者を送り大統曆及び織物を懷良親王に贈り以て我が國をして明の正朔を奉せしめやうとした。親王は怒つて使を拘留したが祖來等は密かに書を當時天臺坐主なる尊道に贈つて其の救を求めた。足利義滿は之れを聞て大に驚き祖來等を迎へ書を明に贈つて好を通じ後又島津義久等と明に書を贈つて通好を求めたが其の書に明の年號を用ひて居なかつたところからして皆斥けられた。當時倭寇は益勢力を得て浙江、福建等の沿岸を侵したからして明は湯和などに命じて頻りに之れが防禦策を講じ沿海の民戸三丁毎に一人を採つて戍兵となした。後倭寇が上海に追つたからして太祖は湯和に命じて之れを防がせたが湯和は方鳴謙を薦め

て之に共に劉策せうと乞うた。そこで太祖は鳴謙を召して倭寇を防ぐ策を問うた。鳴謙が云ふには倭は海上から来るのであるからして我れも亦海上にて防がねばならない。由つて地の遠近を計つて營所を置き陸には歩兵を集め水には戦艦を具へ砦壘をば其の間に配置したならば倭寇は侵入することは出来ない。よしや出来ても岸に達することは出来ない。そして沿海の四丁毎に其の一を採つて戍兵に充てたならば客兵を煩はすことなくして事を使することが出来る。因つて太祖は湯和等に命じて海の東西に營所を置き海邊に五十九城を築き壯丁六萬人ばかりを選んで之れを守らせた。其の後明の成祖のときには我が足利義滿は其の封冊を受けて喜んだほどであるから明軍に應援して倭寇の禁止に努めたが然も倭寇は支那の沿海や朝鮮の海邊に出没して止まなかつた。明の宣宗のときに及んで足利義教は僧の道淵を遣はして勘合符二百枚を得盛んに貿易を試みた爲めに倭寇は暫く衰へた。因つて明は浙江の寧波に提舉市舶司を設け以て海關上のことを司らせた。然るに明の世宗の初年に細川高國の

遣つた使と大内義隆の遣つた使とが寧波に至つて互に前後を争ひ遂に高國の方の使が先きに謁見したので義隆の使は大に怒つて焚掠を恣にして去つた。之れより後明は市舶司を撤去した。市舶司の撤去せられた後支那沿海の人民は苟かに日本人と交易し屢争を生じた爲めに沿海の騷擾再び起り倭寇の難は頻りに明廷を憂へしめた。時に明の奸民汪直等主謀となりて倭兵を指揮し誘つて入寇させたからして其の侵略は益烈しくなり明は王忬を巡撫として之れを防いだが手の着けやうがなかつた。我が紀元二千二百十三年汪直等は倭寇を誘つて大舉入寇し戦艦數百を率ゐて浙江の東西楊子江の南北沿海數千里の間同時に倭寇の侵入を受けて王忬は之れを防ぐことが出来なかつた。明は頻りに巡撫總督の人物を代へて倭寇に當らせたが何れも功を奏せなかつた。其の後汪直は捕へられたが然も倭寇の勢は之れが爲めに甚だしく阻害せられなかつた。然し明に有名なる俞大猷戚繼光の二名將が出づるに及んで倭寇は屢其の破るところとなり我が紀元二千二百二十三年之れ等の名將は倭寇を平海營(福建省)に討

つて大に之れを破り斬首數千。是れより後遂に倭寇は臺灣に退いて甚だしく支那沿海を侵すことはなかつた。倭寇の船は常に八幡大菩薩の旗を掲げて居つたからして支那人は之れを八幡船と稱し非常に恐れたのである。

豊臣秀吉の朝鮮征伐

倭寇の平定されて後久しからずして明は又日本と事を生じた。我が紀元二千二百三十三年に明の神宗は皇帝の位に即いたが年號を萬曆と改め張居世を相となした。張居世の相たる間は明の天下は可なり善く治まつて居たが萬曆十年を以て張居世の薨じた後其の後任者が適當なものでなかつたが爲めに明の政治は又大に衰へた。此の時に當つて豊臣秀吉は既に日本國を統一し戰國の餘勇を鼓して勢威を海外に張らんと欲し明國併呑の目的を以て先づ道を朝鮮に借らんとした。然るに朝鮮王の李昭は明に臣服して居たからして其の乞を聞かなかつた。因て秀吉は先づ朝鮮を蹂躙して然る後に明國に及ばんと欲し小西加藤を先鋒として朝鮮を攻めた。其初めの勢は頗る盛んで久しからずして悉く八道を降し京城に入つて

二王子を擒にした。朝鮮は屢使を明に遣はして其の助を求めた。明は遼陽の總兵監祖承訓等に命じて之れを助けさせた。祖承訓等は小西行長を平壤に攻めたが大に破れて命からく逃れた。因つて明は更に宋應昌を計略となし李如松を大將軍となし大軍を以て朝鮮を救つた。李如松は日本軍の虛に乗じて平壤を包圍し遂に之を占領し進んで碧蹄館に至り日本軍と戦つて大敗し爲めに明の軍氣は大に沮喪した。そこで兵部尙書石星は遊客沈惟敬を小西行長の陣營に遣はして和を議した。當時日本軍も懷郷の情が軍士の間に萌して居つたからして和議は遂に成つて日本兵は二王子を返へして京城を去つた。然も沈惟敬等が明の璽書を奉じて日本に來り秀吉に謁するに及んで其の封冊の文字が頗る秀吉の激怒を招き和議は破裂して日本軍は再び朝鮮に入つた。然も再征の際の日本軍の勢は事實上最初の場合の如く精銳ではなかつた。加ふるに朝鮮及び明の兵は漸く戦に慣れ日本軍を恐るゝこと最初の如くなかつたからして日本の軍は初めの如く八道を蹂躙することは出来なかつた。さて明は邢玠を計略と

し麻貴を大將軍となし日本軍と交戦歳餘にして日本の諸將は次第に退いて釜山浦に集つたが獨り清正の留つて蔚山にあるものをば明の諸將は之れを包圍攻撃したが清正は善く戦つて明兵をして其の威を恣にせしめなかつた。偶々豊臣秀吉が死んだので日本の諸將は皆國に歸つた。此の戦に於て日本軍が十分に働くことの出来なかつたのは第一には十分なる總指揮官を得なかつたことである。秀吉自身が朝鮮にあつて總軍を指揮したならば日本軍の勢力は一層の猛威を表はしたであらう。又日本の水軍が頗る弱かつたことも大に日本軍の勢力に關係した。當時朝鮮の水軍の大將に李舜臣なるものがあつて頗る善く戦ひ日本水軍の將藤堂高虎來島通之を唐項浦に破り九鬼嘉隆、加藤嘉明、脇坂安治等を乃梁に破つた。即ち日本軍は水軍に於て殆んど一回も勝を制することは出来なかつたのである。之れが爲めに軍資糧食の運搬などに於て大なる損害を受けた。是れ日本の陸軍が十分に其の力量を表はすことが出来なかつた重なる原因であらう。然しながら此の戦に於て明は其の財力を盡くしたからして國力

大に衰へ其の滅亡を早められた。

第七節 明末の黨争

大禮の議

明の太祖は即位の初めからして勉めて言路を開き其の公人たるも私人たるを問はず自由に上書して國事を論ずることを許したからして英宗以來宦官の漸く權を専らにするに及んで之れを蛇蝎の如くに惡める學者輩は頻りに朝政の得失を論議した。世宗立つて其の生父及び兄の孝宗に對する尊號に關して朝臣の間に長い間の論争が續いた。世に之れを大禮の議と云ふのである。此の事件は慥かに善く支那人の短所を示したもので僅かに一二字の尊號の爲めに國家の大政を忘れて互に言辭上の空論をなし以て外は累代の外患たる倭寇を防ぐこと能はず。内は英宗以來の國勢の萎微不振を救ふことを知らない。是れ等こそ眞に恐の極である。此の尊號事件が漸く治つたと思ふと神宗の世に至つて又々有名な黨争を生じた。それは東林の黨議と稱するものである。初め神宗の皇后には嗣子がなかつたので帝は寵姫鄭貴妃の所生兒を立て、太子とせうとするの考が

東林の黨議

あつたからして長い間殊更に太子を定めなかつた。そこで群臣は頻りに書を奉つて太子を早く定めなければならぬことを諫めたが何れも罪を得て退けられた。其の退けられた中に顧憲成、鄒元標及び趙南星等の學者があつたが顧憲成は免官の後郷里に歸つて弟子を東林書院に會し學問研究に托して朝政の善惡、人物の可否を評論した。鄒元標及び趙南星も亦各自分の郷里に歸り學徒を集めて遙かに東林書院に應援した。是れ等三人の人物は當時の學者中名高いものであつたからして各地の學者は之れに味方するものが次第に多く又朝臣中にも其の志を得ないものは之れに附和雷同し天下の言論は頗る騒がしくなつた。ところで當路の執政大臣等は大に之れを惡み彼等の排撃に力を盡したからしてこゝに天下は東林黨及び非東林黨の二派となり三案の問題起るに及んで二黨の軋轢は頗る激烈を加へた。所謂三案と云ふのは挺擊の案と、紅丸の案と、移宮の案とである。神宗は其の末年に及んで庶長子を立て、太子と定めたが或る日のこと狂人が太子の宮に侵入して門者を挺撃した。世人は此の狂人の所作

三案

を以て鄭貴妃が太子を殺して己れの子を立てるが爲めに之れを指咻したのであると考へた。東林黨は事太子に關係して居るからして其の事件を嚴重に審問すべき必要ありと主張し非東林黨は事件が貴妃に關係して居るからして寧ろ不問に置くのが善と主張した。之れが所謂挺擊の案と云ふのである。神宗死して光宗繼ぎ日ならずして病んだ。大醫は藥を脩めたが功を奏せないで李可灼なるものが仙丹と稱して紅丸を脩めた。ところが帝はそれを飲んで俄かに死した。非東林黨は李可灼が善意を以て仙丹を脩めたのであるからとて其の事を不問に置くことを主張し東林黨は盛んに其の有罪を主張した。之れを紅丸の案と云ふのである。光宗死して其の寵妃の李選侍なるもの太子の濼宗を擁して居たからして執政大臣などは李選侍が國政に干渉することのあらんことを恐れて強制的に李選侍を他宮に遷らせた。東林黨は政執の權宜を賛成し非東林黨は先帝の寵妃に對して無禮であると尤めた。之れが移宮の案と云ふのである。斯くの如く兩黨は事毎に互に相争つたが光宗より熈宗の初めにかけては葉向

高が相となつて趙南星以下の東林黨を任用して盛んに非東林黨を排斥した。間もなく宦官の魏忠賢なるもの熹宗の乳母と通じて頗る帝の信任を得たからして非東林黨は其の力に因つて悉く東林黨を貶黜した。之れより魏忠賢の勢力頗る盛んになり内外の大權は悉く其の手に歸したからして天下の政は大に亂れた。時も時とて内憂外患交々起つたので明は遂に滅亡せざるを得ざるに至つた。

第三章 清

第一節 滿州の興起と明の滅亡

女眞の諸部

初め金の滅亡以後女眞の諸部は代々元或は明に屬して居たが明の中世以後には其の地は海西、建州、野人の三營に分れて居た。海西は熟女眞で今日の盛京省の西北部及び吉林省の西南部を占めて居つて扈倫部と稱した。建州は生女眞で盛京省の大部分と吉林省の南部とを占め其の中に滿州部及び長白山部があつた。野人は女眞の別種で吉林省の東南部と露西亞の

ヌールハチ
ニ後金の主
となる

沿海州及び黒龍江下流の地を占領して居た。前に言つた滿州部の中に愛親覺羅氏なるものあり。もと長白山北のオトリに居つたが明の英宗の頃オトアラ即ち今の興京に遷つた。我が紀元二千二百四十二年即ち支那は神宗の萬曆十年賢相張居世の死んだ年、日本は織田信長が明智光秀の爲めに本能寺に弑せられた年に今日の清廷の太祖なる努爾哈赤出で、覺羅部の長となり先づ最初に其の直屬せる滿州部を一統した。ところが他の諸部のものはヌールハチの侵略を恐れて互に聯合軍を作つて之れを攻めたが大敗したので遂に降参した。ヌールハチ既に其の近傍を侵略して勢威漸く遠近に耀きモンゴル文字に基いて滿州文字を創造し後世有名な八旗兵を定め規模漸く宏大となつた。そこで萬曆四十四年に大臣等は皆表を奉つてヌールハチを大汗となし國號を後金と立て年號を天命とした。滿州の太祖と云ふのは即ち是れである。

ヌールハチ
ニ明及朝鮮
の援兵を破

前に述べた通り女眞の各部は皆ヌールハチに服従したが獨り扈倫部中の葉赫部のみは其の強を恃んで降らなかつたからしてヌールハチは自

つてエホ部
を領す

ら大軍に將とし我が紀元二千二百七十九年を以て之れを討じた。エホ部は助を明に乞ふたので明も滿州が強大とならない前に之れを討平するを得策とすと考へ楊鎬に三十萬の大軍を授けてエホ部を助けさせた。當時朝鮮の光海君も又明と共に兵二萬を發してエホ部を助けた。ユールナユは此の戰の成敗は自家の發展に大關係があることゝ覺悟したからして發するに望んで有名なる七大恨を書して大に將士の敵愾心を激勵し僅に二萬の寡兵を以て大に聯合軍を渾河畔に破り勝に乗じてエホ部を亡ぼし進んで瀋陽を陥れ遼陽を取り都を瀋陽に定めた。之れが今の所謂奉天府である。當時滿州の領土は東は日本海に臨み西は遼河に至り南は朝鮮と境を接し北は黒龍江に及ぶ。そこで明帝は大に恐れて孫承宗を遼東の計略となした。孫承宗は有名なる人物であつたからして能く其の任を全うすべき筈であつたが魏忠賢の爲めに中傷せられて其の任を全うすることが出来なかつたから明の邊陲は次第に危くなつた。我が紀元二千二百八十七年を以て滿州の太祖は死んで子の太宗が立つた。其の翌年明は蒸

太宗朝鮮を
屬國となす

宗の後を承けて壯烈帝位を即ぎ魏忠賢を退けて有名なる大將袁崇煥を擧用し滿州に當らしめた。そこで滿州の太宗は俄かに明を侵すことの不利益なことを見たからして先づ弱を先きにして朝鮮を討滅せうと謀つた。太宗は其の將の阿敏を遣はして平壤を陥れ急に京城に迫つた。時に朝鮮は光海君の從子仁祖が王位に在つたが滿州軍を防ぐことが出来ないうで江華島に逃れ和を滿州に講じた。其の後間もなく朝鮮は滿州が漠南の蒙古を計略するの虚に乗じて明と通じて遼東を侵さうとしたからして太宗は蒙古より歸つて自ら朝鮮の國都京城を陥れ遂に朝鮮をば屬國となした。時に我が紀元二千二百九十六年である。太宗は既に朝鮮を服したからして力を専らにして明に當つたが當時明の大將袁崇煥が能く之れを防いだので急に其の目的を達する事が出来なかつた。然し間もなく袁崇煥は反間にかゝつて其の職を停められたので滿州兵は進んで山海關に迫つた。そこで明は漠南蒙古のチャハール部に賄賂を贈つて滿州を防がせた。こゝに於て太宗は明を亡ぼす前に漠南を計略するの必要を生じた。當

太宗漢南蒙
古を平定す

國を清と稱
す

明に内亂起
る

時漠南には林丹なるもの頻りに其の暴威を恣にし明を侵して其の歳幣を
貪り遂に明の依頼によつて遼東を侵し又コルチン部が滿州と聯合せるの
を怒つて之れを討ち頻りに其の近傍を侵略したからしてコルチン及び漠
南蒙古の諸部は聯合して林丹を防ぎ救を滿州に乞うた。そこで我が紀元
二千二百九十四年太宗自ら將となつて林丹を討つて之れを敗死せしめ遂
に漠南蒙古を平定した。依て我が紀元二千二百九十六年を以て滿州は國
號を改めて清と稱した。漠南既に清のものとなつて明の北邊は年々其の
侵略を受けたからして明は大軍を吳三桂に授けて北邊の防禦に當らしめ
た。

かくの如く明は外敵の頗る恐るべきものが北邊に現はれたのみならず朝
鮮の役以來國用頗る窮し神宗は宦官を四方に發して鑛山を開き以て府庫
の充實を謀つたが自己の利益をのみ考へて國家の大政を憂ひない姦吏輩
は之れを名として頗る民財を貪つた。之れと同時に諸の課税も次第に増
加したからして天下漸く亂を思ひ我が紀元二千二百八十八年米穀の實の

李自成自立
して皇帝と
なる

吳三桂清に
降る

聖祖頻りに
明の殘黨を
破る

らざるに乗じて李自成張献忠等叛旗を陝西に擧げた。天下四方の流賊は
盛んに之れに響應した。當時陝西山西などの兵は大概邊を守つて不在で
あつたからして流賊の勢は防止さるゝどころなく破竹の勢を以て張献忠
は四川省を略し李自成は河南山西を取つて遂に北京を陥れたからして
壯烈帝は自殺して李自成自ら皇帝と稱した。時に我が紀元二千三百〇四
年で明は大體上二、に滅亡したと云つても善い。太祖國を建て、から實
に二百七十七年である。

此の時に當つて清は太宗の子世祖位にあつて頻りに吳三桂と交戦して居
つたが吳三桂は北京の危急なのを聞いて歸つて之れを救はうと計つたが
道で北京は既に陥落したと聞いたから遂に清と和して其の援兵を乞ひ李
自成を破つて之れを陝西に走らせた。吳三桂は之れを追撃して清軍と共
に行く々々山西河北の地を征略した。そこで世祖は國都を北京に遷し李
自成を陝西に平げ又多鐸を將として河南山東を計略させた。當時明の遺
臣は神宗の孫の福王を南京に擁立し史可法總督となつて清軍の南下を防

いだが多鐸は其の軍を破つて遂に江を渡つて南京を陥れ福王を降した。然かも明の王族中尙浙江江西福建等に割據するもの多く各明の興復を計つたが何れも互に一致共力せないで久しからずして皆清の爲めに撃破せられた。さきに清軍に降つた吳三桂は李自成を陝西に破つてより張獻忠を四川に殺し貴州雲南に進軍したが明の桂王は緬甸に走つて其の助を乞うたので緬甸の王は其の近傍諸部と力を合せて清軍を防いだ。清軍は頻りに兵を進めて國都アザに迫つたが緬甸王は其の地に寓居せるポルチユガル人を雇つて防戦したからして清軍は遂に目的を達せないで兵を班へした。然も緬甸人は清軍の再び之れを侵さんことを恐れ王を弑して桂王を捕へて清に送つた。時に我が紀元二千三百二十二年である。又さきに浙江に於て清軍の爲めに破れた明の遺族魯王は澳門に往いて鄭芝龍の子鄭成功に依頼した。鄭成功は澳門を根據地として頻りに恢復を計つたが久しからずして利を失ひ遂に臺灣に退いた。臺灣は倭寇の盛んなるときに當つては其の占領に歸して明朝は自ら主權を認めて居なかつた。

鄭成功恢復
を圖る
和蘭人と並
海

鄭成功安平
に據る

我が紀元二千二百八十四年和蘭人は何とかして支那貿易の便利を得んと欲し八百人の海軍を率ゐて當時澳門に勢力を張つて居つたポルチユガル人を襲つたが失敗したので澎湖島に退き間もなく日本人を逐うて臺灣に移り西班牙のマニラ總督府の建てた基隆のサンサルワドル城淡水のサンドミンゴ城を奪ひ我が紀元二千二百九十年安平にゼーランチャール城を築き二千三百二年遂に臺灣全島の主權を握り行政を改革し宗教を弘布し文化大に進んだからして明の亡命の士等多く來住した。鄭成功の臺灣を侵して之れに據らうとしたのは我が紀元二千三百十六年である。鄭成功は若し和蘭人に勝つことが出来なかつたならば最早據るべきの地がないのであるからして一生懸命の勢で和蘭人に當つたからして遂に和蘭人は其の逐ふ所となり鄭成功は安平に據つた。それより鄭成功は頻りに亡命を招き盛んに臺灣の富強を謀りフレイツベン群島を侵略するの謀をも立てたが天は之れに年を借さないうで清の康熙帝の元年に歳僅かに三十九で病死した。成功死して其の子の成經が厦門より歸つて父の志を繼ぎ吳三

清、成程を
破つて臺灣
を平ぐ

桂の亂に際して和蘭及び清軍に勝つて兵を沿海に出し以て遂に吳三桂に
應じた。其の後康熙十九年成程は再び大陸を伺ひ厦門を復して一時勢力
を得たが清軍の大に進撃するに當つて遂に降服を乞うたが清の聖祖は之
れを許さずして臺灣をば征討した。清兵は和蘭人の助けを得て遂に成程
をして死せしめ臺灣は清の領土となつた。

第二節 西力東侵の開幕

初め蒙古が歐亞の二大陸を征服して空前の大帝國を建設して以來歐亞の
交通は頗る頻繁となり黒海沿岸のクリミア及びコンスタンチノープルな
どは繁榮なる東西貿易市場となつた。然るにオットマン帝國の勃興する
に及んで黒海の航海權は其の掌握するところとなり、こゝに歐羅巴人は東
洋に出づべき新航路發見の必要を生じた。此の新航路發見に對して第一
着に熱心であつたのはポルチユガル國である。元來ポルチユガル國は歐
洲列國中最も舊教熱の盛な國であつたからして其の蛇蝎視せるイスラム
教國の土地を踏まないでパレスチナの聖墓に達するの道を得んと希望し

ポルチユガ
ル人の東洋
航路發見

た。是れポルチユガル國が新航路發見熱の盛んであつた一原因である。

當時ポルチユガルの王子ヘンリーなるものは自ら資金を投じて自國の南
角ザグレスの地に一つの航海學校を興し合せて天文觀測場及び海軍の武
庫を建てそして亞弗利加の西海岸を探究するが爲めに屢此の地よりして
船隊を派遣した。之れより先きポルチユガル人は既にカナリヤ群島など
を發見して居つたがこゝに至つて又ボチャドールを廻航しヘンリーの死
んだときにはシエラレタキに達した。我が紀元二千百四十六年に至りポ
ルチユガル人バーソロミューチアツ遂に喜望峰に達し二千百五十八年に
は同じポルチユガル人ヴァスコダガマは遂に喜望峰を廻つて前印度の沿
岸カルカッタに達した。こゝに至つてヘンリーの目的とした東印度航海
の新航路は發見された。此一大發見の利益を保護する爲めにポルチユガ
ル人はガブラルをして大兵船に乘じ印度に赴かせたが道で潮流に遇うて
ブラジル海岸に漂流したからして遂に此の地を以てポルチユガルの領地
となした。ポルチユガル人の印度と直接に通商するに至つて埃及の商權

ポルチユガ
ル人の印度
計略

は頗る侵害せらるゝところとなつたからしてエジプトのサルメンは印度に軍艦を派遣し印度の諸王と連合して共にボルチユガル人を掃蕩驅逐せうと計つたからしてボルチユガル人は長い間戦争に従事し具さに艱苦を嘗めた。我が紀元二千百六十五年アルメーダ、ボルチユガルの印度總督となるや城をコチに築き印度洋の制海權を占めて以て其の目的を達せやうとした。後四年にして有名なるアルブケルク總督となるに及び總督府をゴアに開き盛に印度の經營を劃策した。アルブケルクはペルシャ灣頭のホラムツを以て策源地となしコチを貿易港となし我が紀元二千百七十一年には進んでマラツカを略し遂にテルナラ島に據つてモルカ群島を制した。明の成祖が南洋を計略して以來支那人の南洋に通商する者が甚だ多かつたからして已にマラツカやジャワを占領して居るボルチユガル人は新たに航海を東に求めて我が紀元二千百七十四年始めて支那海に達し其の後三年で廣東に着し次いで寧波、廈門に貿易場を立てたが越つて二千二百二十三年更に廣東の澳門マカオ（當時阿瑪港と稱す）を占領して之れを根據地と

ボルチユガル人東洋の貿易權を占む

スペイン東洋計略

マニラを根據地とす

なし尙も進んで我が國の肥前平戸にも商館を設け盛んに貿易に従事した。實に我が紀元二千百六十年より百四十年ばかりの間は東洋貿易の全權は殆んど全くボルチユガル人に占有せられて居たのである。ボルチユガル人に次いで東洋に勢力を得たのはスペイン人である。スペイン人はボルチユガル人が喜望峯を越つて東洋に達するの航路を發見しつゝあるの間に寧ろ西方に航して東洋に達せんことを計り我が紀元二千百八十年遂に有名なるスペイン人マゼランは亞米利加の南端を越つて始めて太平洋に出でた。ときにスペインの勢力益盛んに有名なるフィリッピン二世はボルチユガルを併呑し益東洋貿易を奨励せんと欲し我が紀元二千二百二十五年には遂にフィリッピン群島を占領してマニラを建設し之を以て東洋に於ける根據地となし明の神宗の世に使を遣はして通商貿易のことを議したが已に在留せるボルチユガル商人に妨げられて要領を得なかつた。然し日本の平戸には商館を開いて貿易を營み又マニラでは支那人との貿易が盛んに行はれた。

オランダの東洋計略

ジャバを根拠地とす

オランダが我國との貿易を壟断し得た所以

スペインに次いで東洋に手を延ばしたのはオランダと英國とである。オランダは歐洲の一小國で始めスペインの屬國であつたが宗教上の争より遂に獨立し我が紀元二千二百五十六年始めて東洋に遠征し錫蘭マラッカ、スマトラ其の他スペインの殖民地を奪ひ先開國なるポルチユガルやスペインの商人を追ひ拂ひジャバにバタビヤ府を建て、東洋の根據地となし我が紀元二千二百八十四年には臺灣を占領して盛んに日本及び支那と貿易を行つた。清の世祖の代に至つてバタビヤの太守は使を北京に遣はして通商を求めたが是れ又スペイン人と同じくポルチユガル人に妨げられて要領を得なかつた。後鄭成功の爲めに臺灣を奪はれたからしてオランダの海軍は清國を助けて屢鄭氏の軍を破り其の功によつて廣東に通商するの特権を得た。當時日本はゼスイスト教の勢力に恐れて從來默許して居た歐洲各國との通商貿易をば禁断したが只オランダのみは宗教の傳播を計らずして單に貿易のみに従事したからして長崎で長く貿易に従事することを許された。蓋しポルチユガルスペインなどは舊教信者の國であ

るからして其の傳教も頗る熱心であつて之れを一つの手段として他國を奪ふ目的を包蔵することが明かであつたからして日本國は大に之れを恐れたがオランダは新教國であるからして寧ろ宗教には執着少く専ら商業上の利益のみをば目的とした。そこで長く東洋貿易上の利益を壟断することが出来た。

英國の東洋計略

英人は我が紀元二千二百三十九年に初めて印度に航しそれより印度を始めとし暹羅、ジャバなどに商館を開き次いで我が平戸にも來て貿易を營み二千二百九十五年には支那の廣東、厦門で通商を試みたが日本の貿易はオランダ人に妨害せられ支那の貿易はポルチユガル人に妨害せられたからして共に其の目的を達することが出来なかつたが獨り印度に於ては絶大の勢力を得て先入人たるオランダ、ポルチユガルの商人を壓倒した。佛國及び露國が東洋に手を出したのは英國に次いである。以上に述べた諸國が東洋に航路を開いて盛んに貿易を擴張せうと計つて居るときは歐羅巴に於て宗教改革の争頗る激烈に一時新教の勢は舊教を

壓倒したからして舊教徒は其勢力を東洋に恢復せんと欲し中にも彼の目的は手段を神聖にすとの極端なる布教策を採つたところの有名なるゼス
 イスト派の教徒は陸續として東洋に入り込んだ。その初めて印度に來た
 のは我が紀元二千百六十年で其の後ゴアを根據地として盛んに傳道をな
 したが其の傳道師の一人に有名なるフランシス・サヴィエルなるものがあ
 つた。彼れは我が紀元二千二百〇二年にゴアに來り後數年にして日本の
 平戸に來り其の後京都豊後周防の地方に熱心に布教を試み多くの極端な
 る信仰者を得、次いでゴアに歸り又支那に布教せんとて出發したが途中で
 死んだ。世に彼れを稱して印度のアポストロスと云ふ。サヴィエルに次
 いで有名なる布教者はマテウ・リッチである。彼れは伊太利の人で明の神
 宗の萬曆八年に澳門に來り支那語を學んで頻りに漢人を教化し南京へ入
 り入明後二十一年目に同志のポントーハと共に燕京に至り大に神宗の好
 遇するところとなり寺院の建立を許された。マテオ・リッチは常に熱心に
 耶蘇教を傳へたのみならず之れと同時に支那の信者と共に乾坤體義など

フランシス、
サヴィエルの
舊教弘布

マテウ、リ
ッチの布教
と科學的智
識の弘布

其の他諸種の科學書を著し支那人をして歐羅巴の新知識を得せしめた。
 彼れが五十八歳を一期として萬曆三十八年に死んだ頃には支那に於け
 る基督敎の勢力は半平として又振く可からざるに至つた。其の後熱心な
 る布教者は多く東洋に入り込み時に或は布教の嚴禁を受たこともあるが
 然しながら元來彼れ等は歐羅巴の地理、天文、曆數、砲術に精通して居つたか
 らしてたとへ一時は退けられることがあつても是等の實用的知識の側よ
 りして直ちに又信仰を博するに至つた。清朝の明を亡ぼして世祖が北京
 に入るに及んで耶蘇教徒を好遇しアダム・シャールを擧用して欽天監とな
 したのを見て如何に清朝が歐羅巴の科學に重きを置いたかを知ることが
 出来る。此のアダム・シャールに次いでフェルビーストも有名なる康熙帝
 に信用せられ盛んに歐羅巴の科學を支那に移植した。然るに猜忌心に富
 める舊教徒は單にゼスィスト教徒のみが北清に居つて信用を博するを嫉
 み、こゝにゼスィスト教徒と他の舊教徒との間に傳教上の争闘を生じ遂に
 之れを羅馬法王に訴へたがクレメント第十一世はゼスィスト教徒を誹責

アダム、シ
ヤールと稱

フェルビ
ーストと康熙
帝

した。然しながら清の康熙帝は却つて之れを保護し他の耶蘇教徒の退去を命じ其の不平を抱けるもの多きに及んで世宗の時代に至つて遂に天主教嚴禁の令を下した。

第三節 康熙帝

我が紀元二千三百二十二年(即ち後西院天皇の末年徳川家綱の時代に清朝第一の賢主なる聖祖が清國皇帝の位に即いた。此の一代の年號を康熙と云ふので世に之れを康熙帝と稱するので其の治世は實に我紀元二千三百八十二年まで六十一年間に亘る。康熙帝が臺灣を平定したことはさきに述べたが帝の即位の初めに當つて有名なる三藩の亂があつた。

三藩の亂

明の末に當つて吳三桂を初めとし孔有徳耿仲明尚可喜などは清に降つて最も重んぜられ何れも一方の王とされた。清帝が彼れ等服將を好遇した所以のものは元來清は北滿州に起つたからして其の兵は北方支那の戰爭には頗る長じて居つたが南方に戦ふに當つては氣候其の他の事情からして甚だ不適當な點があつた。然るに吳三桂等は此の清兵の缺點を補つて

南部支那の平定に頗る助力するところがあつたからして従つて清朝の重用するところとなつたのである。そこで南方平定の後は吳三桂は雲南に尚可喜は廣東に耿仲明及び其の子の耿繼茂は福建に王とせられ孔有徳は既に戦歿したからして其の女婿が重用せられた。されば清帝は北方支那に於ては十分なる統治權を有して居たが南方支那に於ては未だ專制權を十分に振ふことが出来なかつた。中にも吳三桂は功最も高く兵力も頗る強大で嚴然たる一獨立國たるが如き觀があつた。かくの如きもの、存在することは素より清帝の本意でなかつたからして機會があつたならば彼れ等の權力を殺がうと計るのは理の當然で吳三桂等も亦不安の情に堪へなかつた。そこで清帝の本意を確めやうと思つて康熙の初めに耿繼茂の子耿精忠と相談の上で心にもない撤兵のことを清帝に乞うて見た。清廷に於ては撤兵を可とするものと非とする論者とがあつて互に論難攻撃の結果康熙帝は撤兵を可とする論に賛成し彼等を山海關の外に置かうとした。吳三桂等は愈清帝が己れ等を除く心のあることを明かにしたから陽

には勅を奉ずと稱し遂に康熙十一年を以て叛旗を擧げた。是れよりさき清帝は辮髮の令を發して大に漢民族の感情を害して居たからして吳三桂は之れを利用し髮を蓄へ衣冠を明の昔にかへして以て漢民族の甘心を買ひ盛んに兵を集めた。是に於て雲貴二省は忽ちに吳三桂に歸した。然し彼れが明の臣にてありながら清廷に降つて頻りに明末の諸王を討伐したことは漢民族の深く怨んで居つたところであつたからして豫期せる如くには勢力を得なかつた。康熙帝は勒爾錦及び赫業などを大將として三桂を討せしめた。されど三桂は湖南に進み沅州を陥れたからして清の兵は容易に江を渡ることが出来なかつた。此の勢を見て福建の耿精忠等又叛旗を擧げ爲めに南方六省は三桂の味方となつた。尙可喜の子尙之信も亦賊に應じたが間もなく耿精忠は三桂を助けた所の臺灣の鄭成經と不和であつたからして遂に清に降り尙之信も亦廣東を以て清に降つた。かくして吳三桂は初めの勢を失し退いて衡州に居り皇帝を稱したが遂に康熙十七年を以て憂鬱病をなして死んだ。孫の世璠が帝位について雲南に退

露西亞の勃興

き一時清軍に敵したが是れ又康熙二十年に清將の爲めに五華山に圍まれて自殺したので雲貴四川湖南の地は全く平定した。此の三藩の叛は實に康熙の時代に取つては由々しき大事であつたが姑息なる平和論者の言に耳を傾けないで斷々乎として之れを討滅したのは實に康熙帝の人物が偉大であつたからである。

康熙帝の時代に於ける成功は之れのみには止まらないで清露の外交と云ひズンガルの征服と云ひ西藏の遠征と云ひ何れも成功した。露西亞は二百數十年の間蒙古の羈絆を脱することが出来なかつたが有名なるジャンニベクの死後キプチャック汗の國勢衰へたからしてモスコの大公イブアン第三世は露西亞の諸侯を糾合してキプチャック汗國を討ち我が紀元二千百四十年を以て之れを亡ぼした。之れよりモスコの大公の勢は次第に盛大となりイブアン第四世のときにはカザン汗アストラ汗國などを亡ぼし初めてツアルの尊號を用ひた。此のときに當つて南露西亞にコサックと稱する民族あり盜賊を其の業となして居つたが我が紀元二千二百四十年

にエルマルクと稱する一豪傑がブオル河コサツクの長となつた。彼れは屢モスコーに輸送すべき貢物を掠奪したのでツアルに逐はれてウラル山附近の豪族ストロガノフ家に依つた。ストロガノフ家はエルマルクに兵を貸して頻りにシビルの地を征し次いでオンチャツク部を降した。之れが露西亞のシベリヤに手を着けた始めて之れよりツアルはエルマルクの罪を釋るして頻りにシベリヤの開拓に従事せしめた。

我が紀元二千二百七十三年にロマノフは露國の内亂を定めてツアルとなり頗る心を東部シベリヤの開拓に用ひた。之れよりさき露西亞は例のコサツク兵を用ひて頻りにシベリヤの地を略し西部の方は全く露領となつて居たのである。さて東部シベリヤの探險に功名をなしたものはポヤルコフを始めとしハバロフなど續々あつた。ポヤルコフは我が紀元二千三百〇三年に僅かに百三十人ばかりのコサツク兵を率ゐてヤクツクを發しヤプロノイ山脈を越へ幾多の艱難を侵して翌年遂に殆めて黒龍江に達し松花江の河口に出で其れよりオコツク海に浮び歸路スタノボイ山脈を越

露國東部シベリヤ侵略

わてヤクツクに歸つた。之れに次いで我が紀元二千三百〇九年にハバロフの同志の者數十人とヤクツクを發し翌年黒龍江口に達したが餘りに同行の者が少なかつたので一旦ヤクツクに歸つて更に二百人弱の同志者を募り黒龍江口に至り後來露國の東部シベリヤの根據地となつた有名なアルバジン城をヤクサに築き更に進んでウスリー湖口に達した。是れは今のハバロフカの地である。ハバロフに次いでメラバノフコサツク兵を總べ我が紀元二千三百十四年を以て松花江を遡り清軍の爲めに一旦擊退せられたが其の後二年にして再び松花江を遡り吉林省のニングタまで進んだ。そこで清の世祖はサルフダ、バハイなどを遣はして之れを擊退した。されど支那の康熙八年に至つてチエルニコフスキは再ビアルバジン城を恢復して黒龍江の經營に着手した。此の時には支那に三藩の亂があつたからして北方に力を伸ばす暇がなかつたのである。そこで露西亞人は頻りに黒龍江方面を侵略したが康熙二十年に至て三藩の亂も平定したからして聖祖は漸く心を北方に注ぎ我が紀元二千三百四十三年を以て彭春

ズンガル部のガルダン

を遣はし愛璽城を築いて之れに當らしめ我が紀元二千三百四十五年には遂にアルハジン城を陥れた。此の時露西亞には有名なるビートル大帝が位にあつたからしてこゝに東西の兩英主は外交手段に由つて境界の確定をなさんと欲しビートル大帝はゴロウインを遣はし聖祖は索額圖を使節としてネルチンスクに於て談判せしめた。我が紀元二千三百四十九年に於て遂に有名なるネルチンスク條約なるものを締結した。此の談判に於てはゼスイスト教の僧侶が清國の譯官となつて頗る強剛な手段を取つたからして其の結果は比較的に清の方に幸した。此の條約に於てはヌタノボイ山を以て兩國の境界となし山南黒龍江に入る溪河は悉く清國に屬し山北一帶の溪河は悉く露西亞に屬する事となつた。又アルハジン城は之を毀つて兩國の人民が妄りに境界を越ゆることを許さないことにした。この後聖祖は黒龍江沿岸の地に屯田兵を置き頗る其の守を嚴にしたからしてさすがの露西亞も一時南下の勢を殺がれた。明の時代に於て一時頗る勢力を有したウエーラトのエツセンの後裔は四

ガルダンのルカを破る

聖祖のガルダン征服

部に分れたが其の中でイリ河方面に居るものをズンガル部と稱した。聖祖のときに至つて此のズンガル部に一大豪傑を出した。それはガルダンと云ふものである。其の初め彼れは嫡子でないところからして僧となつて出世間的に勢力を得やうと欲し西藏に這入つてダライラマに依頼したが彼れが同母兄のセングゲを殺したことが知れたので喇嘛の拒絶するところとなり再び本國に歸つた。ところが意外にも國人の尊敬するところとなり悉く己れに反對せるところのものを排斥し頻りに近傍の諸部を併せイリ、青海を根據とし南は回部を降し其の威令は西藏にまで及んだ。由つて使を支那に遣はして其の状況を探らせたところが三藩の叛亂の際であつたからしてガルダンは好機乘すべしとなし北方カルカを攻めた。カルカは自ら成吉汗の宗家を以て任じ頗る尊大に構へて居たがガルダンの攻め入つたときには内訌に苦んで居たからしてガルダンは大に之れを破ることが出来た。そこで其の人民は悉く内蒙古に逃れ次いで清朝に投じた。當時聖祖は已に三藩を平げ露西亞との境界問題も確定したから

して大に兵を發してガルダンを攻めやうとしたが其の戦に先き立つてさきにガルダんに殺されたセングケの子のツエウワン、ラブゲンなるものが父の仇を報せんとして起つたのでガルダンは一時其の勢力を失つた。然し間もなく勢を恢復して清朝の使節を抑留したからして聖祖は親征の議を決し三軍に分つて自ら一軍を率ゐてケルレン河の方面に向つた。ガルダンは後へにツエウワン、ラブゲンの狙へるのを以て露西亞人と結合せうとしたが成らなかつた。そこで聖祖は大に喜び蒙古平原に進んで必ずガルダンを亡ぼさうと期した。ガルダンは能く清の前衛の將を破つたけれども到底其の力の足らないことを知つたからして一時降を乞うたが聖祖は許さないで皇弟の福全をして頻りに兵を進めしめ遂に烏爾布通に於て大にガルダンを破り彼をして再び降を乞ふの止むを得ざるに至らしめた。聖祖はガルダンの降服は誠意より出たものでないことを知つたけれども清軍の損害も甚だ多かつたので之れを許した。其後聖祖はツエウワン、ラブダんに結んで以つてガルダンの後を牽制せうとしたがガルダンは其

聖祖ミラブ
ダニの西
戦交渉

の使者を捕へて之れを虐殺した。こゝに於て戦争は再び開かるゝに至つた。此戦に於て聖祖はコルチン部のものに勸めてガルダんに應ずる真似して彼れを誘つて清の境に這入らすやうになさせた。そして聖祖は總勢十五萬人を四軍に分ち第一軍は費楊古をして之れを率ゐしめ第二軍は聖祖自ら之れを率ゐ第三軍は薩布素をして之れを率ゐしめ第四軍を以て補充軍となした。聖祖は費楊古と並んでゴビ砂漠を涉り科布多なるガルダンの本營に向つて進んだ。清軍の損害も日々に多かつたが然も續々成功して次第にガルダンの軍を退けて遂に費楊古はトラス河に於て大にガルダンの軍を破り彼れをして死せしむるに至つた。時は我が紀元二千三百五十七年である。

ガルダンは既に敗死したが之れに代つてツエウワン、ラブゲンが再び聖祖の愛となつた。彼れは表面上聖祖に敵對はせなかつたが元來野心のあつたものであるからして深く中央亞細亞の民族と結びキルギンと婚を通じ以て東はハイミより西はホーカンドに至る迄の地に勢力を占めた。ラブ

ダンは西藏を得ることを以て其の目的としたものであるが聖祖も當時は西藏の領有を確實にして居なかつたのでこゝに兩者の間に外交上の争を生じ搗て、加へて西藏内部の争亂は事件を一層大ならしめた。初め喇嘛教は元帝の好遇を受けて却つて其の教風の潰亂を來たし或は幻術を事とし或は妻帯をなすやうになつた。明の時代に於て甘肅省の人のソソカワなるもの出で、喇嘛教の改革を唱へ從來の紅衣紅帽を改めて黄衣黄帽となしたからして之れを喇嘛黄教と稱した。其の後紅黄二教は激烈なる争をなしガルダンの滅亡の頃に至つて遂に黄教の勝利となつた。此の勝利は清國の援助に由つたもので紅教はブータンに退いて其の勢力を保つた。喇嘛黄教は已に勝利を得たものゝ其の後尙ほ種々の内亂を生じ其の機會に乗じてラブダンは西藏に遠征せんとした。我が紀元二千三百六十九年ラブダンの軍はイリーヲ發じ東トルキスタンを経て行く行く略奪を恣にし大に西藏を掠めてイリーの本領に凱旋した。然も其一軍の西寧に向つたものは清軍の爲めに破られて退いた。聖祖は又一軍を西方ハーンミよ

リツルフワンに向はせたが此の軍は大にズンガル兵に破られ殆んどハーンミを失はんとしたが援軍大に至つた爲めにハーンミを復し之れと同時に聖祖は兵を西藏に送り公使をラツサに置き西藏の占領を確實にした。ラブダンは西藏に失敗の後も尙ほ可なりの勢力を有して露西亞と屢交戦した。露西亞のピートル第一世は天山南路の方面に砂金が多いと云ふを聞いて例のコサツク兵を遣して探險さうとしたがラブダンは之れを拒絶したので我が紀元二千三百八十年にはイルチシユ河の上流で兩國の軍は大に戦つたが雌雄を決せなかつたので間もなく講和し其の後ラブダンは専ら清國に向つて對抗した。我が紀元二千三百八十七年(清に於ては康熙帝既に歿して世宗の世の中となつて居る)にラブダンは死んで其の子のガルダン、チエーレンが立つて父の遺志を繼ぎ屢清の境を侵したがサイノヤンの部長ツौरリンの爲めにオルコン河畔に破られて遂に清に向つて和を乞うた。そこで清はアルタイ山を以てカルカとズンガル兩部の境界となし互に相越ゆることを得ないやうに約した。

上に述べた通り康熙帝は外征の方面に於ては何れも好結果を奏したが内治に於ても頗る成功多く殊に帝は學事に熱心し彼の佩文韻府淵鑑類函康熙字典の如き大編述を完成した。其の在位は實に六十一年の長日月に渡り清朝の基礎は此の時に至つて完成したと云つて宜からう。

第四節 乾隆帝

聖祖崩じて子の世宗即雍正帝が立つたが在位が甚だ短かつた。雍正帝に次いで立つたのは有名な高宗乾隆帝である。乾隆帝も聖祖と同じく非常に長い間帝位にあつたので其の間種々の事件が起つた。即ち高宗の在位は我が紀元二千三百九十六年より二千四百五十五年迄六十年の長日月であつた。

ガルダン、チエーレンは我が紀元二千四百〇五年に死んで其の後嗣の爲めにツンガルは種々の争亂を生じた。清の駐在軍も此争亂に騒がせられて止むなく一時ハーミ及びツルファンより退いた。當時ダルシヤなる者あり。ラーマの助を借つてツンガルの君となつたが一方にアムルサナなる

ツンガルの
侵略

ものがあつてタワチイを助けて之と位を争つた。結局ダルシヤは破れてタワチイが君となつた。アムルサナは擁立の功を恃んでタワチイと隙を生じ逃れて清國に入り以てツンガルを統御するの策略を説いた。そこで乾隆帝は清の驍將班第に十五萬の軍を授けてアムルサナと共にツンガルを遠征せしめた。二將はゴビの大砂漠を横切つてイリに進軍した。タワチイはかくの如き大軍が急に至つたので大に驚いて降参した。アムルサナは遂にツンガルの君となつた。然も彼れは元來清國に誠意より従つて居るのではないのであつたからして漸く其の本心を發せんとするときに當つて乾隆帝がタワチイを厚く遇したので遂に叛旗を擧げることになり心した。然し兵力が足りないからして先づ詐つて班第より精兵を借つてカシユガル及びヤールカンドの兩都を陥れバルハン、ウツデンなるものを留めて之れを守備させた。かくして彼れは勢を得たからして遂に叛旗を擧げて班第を襲つて之れを殺した。乾隆帝は大に怒り大兵を發してアムルサナを討じたので彼れはキルギス荒原に逃れ又歸つて兵を擧げたが

中央亞細亞
の征服

清の大將の兆惠出づるに及んで再びキルギスに隠れた。兆惠は彼れを追撃して止まなかつたがアムルサナは遂に露領に逃げ込んだ。アムルサナの敗北に由つて清國はイリー及びツングルの地方を得たがカシユガル即ち東トルコスタンの地方にはさきにアムルサナが留置したところのウツチンなるものがあつて尙ほ之れを占領して居る。ウツチンは一名ボロニツツと稱しコヂチヤンなるものと共にホジヤであつた。清國に於て所謂大和卓木、小和卓木と云ふのは即ち此の二人を指すのである。其の兄の方はカシユガルに弟の方はヤールカンドに居つて兄はアムルサナに味方して清國と戦ひアムルサナがシベリヤに逃亡するに至つて弟の許に逃れた。そこで弟は之れを庇護したので清國との衝突が起つた。初めの間は和卓木は能く戦つたが遂に敗北してカシユガル、ヤールカンド共に失ひ兄弟はバミールを越えてバダクシャンに逃れたが其の酋長の爲めに殺された。此の和卓木の平定と共に清軍はタシユクント及びホーカンドの地を奪ひキルギス荒原の酋長も亦清國に向つて入朝するに至つた。此

緬、暹との
關係

に於て清の國威は中央亞細亞にまで振つた。乾隆帝の時代にはかくの如く西北方面に事があつたばかりではなく南境に於ても之れに劣らないほどの戦争があつた。それは緬甸及び暹羅などとの關係である。緬甸はベルグタリの後頻りに内亂が起つたので其一部なるベグ部獨立して日々に其の勢力を増し遂に國都アヴァを陥れイラワヂイ河の上流に住する諸蕃族をも征服したが獨アヴァの北方に住せる木疏の部長アロルブラなるものみは之れに服せないので對抗軍を起し遂にアヴァを奪つて新緬甸國を建立した。これ我が紀元二千四百十三年である。彼れは管にベグ部に克つたのみならずアッサムの地方を降し又兵を出して暹羅を攻めた。暹羅はさきに緬甸の羈絆を脱した後も王位相續のために内亂が絶わないうで外國人などの此の地に寄留して居るものが屢其の内亂に乗じて高位高官を占めた。我が國の山田長政が我が紀元二千二百八十年ころに暹羅に滞在して居つた日本人を集めて内亂を鎮定し貴族に列して王の娘を妻としたことは日本の歴史にも表はれて居る。其の

後數十年にして希臘人なるコンスタンチンと云ふものが暹羅に來つて日本人を妻とし暹羅王の信任を得て大に耶蘇教を傳播した。その後彼れは王に説いて佛蘭西の保護を仰ぐことを勧めた。當時佛國には有名なるルイ第十四世が君となつて居つたからして喜んで之れを許し我が紀元二千三百四十五年若干の兵を暹羅に送つたが王と反對の意見を有する國民は之れを怒りコンスタンチンを殺して佛國兵を逐うた。然し之れより暹羅の國威は益振はなくなつた。ところへアロンブラ及び其の子のミエツ、メングなどが屢入寇したので二千四百二十七年には遂に國都を陥れられた。かくの如く緬甸の勢力が盛んになるに及んで屢雲南地方を侵し爲めに清の大將明瑞も戦死したが我が紀元二千四百二十九年に傅恒なるもの乾隆帝の命を奉じて水陸より兵を進めアツアを屠らうとした。この戦に於ては兩國の軍は互に勝敗があつたが遂にガウンタンの平和條約を締結して軍を止めた。或る人は云ふ當時緬甸軍が強かつたのは佛蘭西やポルチガルの將士がこれに加はつて居つたからである。然し一方から見

乾隆帝緬甸を征す

暹羅と清

れば清國の軍が常に此の地方に於て十分に其の勢力を伸ばすことが出来ないのは地勢と氣候との關係に由ることが多いのであらう。換言すれば此の地方の軍が本來清軍より強かつたのではなくして南方瘴癘の氣清軍の衛生に大打撃を與へこれがために緬甸國の兵が屢勝つことが出来たのであらう。だから假令清軍が破れてもそれは只此の地方に於ける權力を失ふばかりで真正に中國の強敵として恐れるには足らない。古來支那の西方や北方よりは常に大敵が現はれて中原の地を併呑したに拘はらず安南や暹羅の地方からしては未だ一度も中原を併呑する程の大人物を出さなかつたことは吾々の大に注意を拂ふべきことであらう。さて緬甸が清軍と交戦して居る際に當つて漢人鄭昭なるもの此の機に乗じて暹羅國を再興し初めて都をバンコックに定めた。緬甸は清と講和した後兵を暹羅に用ひたがさきの如く勢を恣にすることは出来なかつた。其の後鄭昭は内亂のために殺され我が紀元二千四百四十二年フアヤチャックリなるもの之れに代つて暹羅王となり清國に入朝して乾隆帝のために暹羅國王と

苗族の難

なされた。これが現在の暹羅王家の始祖である。清國は緬甸と講和して間もなく貴州四川の方面に苗族の難があつた。四川の苗族には大金川、小金川などの別があつて共に強盛で清國派遣の有司は之れを統御することが出来なかつた。そこで乾隆帝は阿桂等を將として之れを征討させたが阿桂は第一に小金川を平定し次いで大金川に向つた。ときに酋長に索諾木なるものがあつて能く戦ひ婦女子に至るまで武器を取つて清軍に抵抗した。清軍は土地の險隘な爲めに大兵を進めることが出来ないうで非常な困難を嘗めたが遂に索諾木に生命の保全を約して降参させた。かくして大金川は陥られたからして貴州の苗族も清軍の威に恐れて再び清の境を騒がすことをせなかつた。乾隆帝は阿桂の約束を破つて索諾木並びに其の一族を北京に誅し其の他の苗族をイリ地方に流竄した。

グールカ征服

印度北部の民族にグールカなるものがあつた。此のグールカ民族は頗る慍悍なもので商業や交通を事とせないうで略奪を以て唯一の活路となし北

はヒマラヤ山路を越わて西藏に侵入し南は印度を侵して屢其の略奪の慾を恣にした。グールカ人が西藏に侵入を企てたのは清國の援兵が道が遠い爲めに容易に來ないであらうと想像し且つ喇嘛の寺院には無限の財寶があると云ふことを信じたからである。我が紀元二千四百五十一年グールカ兵は二萬ばかり西藏に入つて有名なるラシウ、パンボの喇嘛寺を掠奪した。西藏人は急に助を北京に乞うたのみならず印度に住する英吉利人にも之れを求めた。乾隆帝は英吉利人が西藏に後日の關係を生ずることを嫌つて急に大兵を派遣した。グールカ人は意外にも七萬の清軍が急に進んで來たからして遂に退軍した。清軍は之れを追撃してヒマラヤ山中に入り降を勧めたが其の條件中に掠奪品を返還すべしと云ふことがあつたのでグールカ人は之れに應せなかつた。グールカ人は山路に慣れて居るからして頗る清軍を惱ませたが然も一步步々清軍の爲めに損害を蒙り清軍は死傷の頗る多かつたものゝグールカの國都カトマンヅに至つたときに向ほ四萬の兵を有して居たからして益急にグールカを打ち最後にク

チ河畔に激戦してグルルカを屈服させた。乾隆帝は右の外安南の内亂の平定及び臺灣の鎮定に於ても結局の功を奏し且つ文治に於ても種々の功績があつたので實に前の康熙帝と乾隆帝との時代は清國の勢は旭日冲天と言つても善かつたので是れから後は清國の勢は次第に衰退を催うした。

第五節 英國の印度征略

印度はタメルランの退軍後トクラック王家再びデルヒに君臨したが然も其の勢全く地に落ちて殆んど無政府の状態となつた。明の嘉靖七年にハールベルなるものアフガニスタンより印度に侵入してデルヒを陥れ近傍のラジャント民族を征服しアムーダリヤよりガンヂス河の下流に至る大版圖を占領したが其の子のフマーユンに至つて叔父のカムラーンの爲めに殆んど其の國を簒奪されやうとしてベルシヤに逃れた。ベルシヤ王タマスブは之れを歓迎し兵を貸してカムラーンを討ち破りアフガニスタンのバタクシヤンを復し我が紀元二千二百十五年にフマーユンは再び

トラルック
王家

印度に侵入したが間もなく死んで其の子のアクバル繼ぎ都をデルヒの東南アグラに定めラジャント族と婚を通じて其の團結を堅くしこれまで徴收し來つた非回教徒税を廢して以てヒンヅー教徒の甘心を買ひ遂に印度に於けるアフガニスタンの回教國を亡ぼし新たにムールガル帝國を創立してアムーダリヤ河以南ヒンヅークシュ山以北の地に君臨して以て父祖の志を成就した。そこでアクバルは屢々兵を南方に用ひたが回教國の聯合軍の爲めに破られて其志を達せなかつた。アクバルの子孫三世の間父祖の志を繼いで遂に南方經路を全くし回教國を征服して印度の全體は又統一國となつた。其後百年ばかりにして此のムールガル帝國は頗る衰微の徴を表はした。これよりさきベルシヤのアハス第二世はムールガル帝が南方經路に力を注いで居るのを機として屢兵を出してアフガニスタンを侵し遂に印度河外の地を占領したがムールガル帝國は之れを防厯することが出来なかつた。加ふるに當時のムールガル帝は祖先の政略を忘れて非回教徒税を復興しヒンヅー教徒の仕官を禁じたからしてラジャント族の叛亂を

ハルシヤ

企つるもの頻りに起り殊に南印度のヒンヅー教徒は有名なるマールタ同盟を組織し盛んなる抵抗をなしたからしてムールガル帝は我が紀元二千三百四十二年より二十年の久しき之れが征服に力を用ひたが功を奏せなかつた。其の後マールタ同盟の勢益盛んに次第にヒンヅークツシユ山南の地を席卷しこれと同時にベルシヤは印度河外の地を侵略したのでムール帝國の勢は頗る衰へた。然も當時ベルシヤも亦内亂が起つたので其の屈服さるゝどころとなつて居たアフガニスタン人は漸く獨立の機を覗ひ支那の康熙四十七年にはミルヴァイスなるものアフガニスタン人を率ゐて叛旗を掲げ其の子のマールムードに至つて遂にイスバハンに入つてベルシヤ王となつた。當時露國はピートル大帝が東方侵略を企て、居つた際であるからしてマールムードのベルシヤ國王たる主權を否認し兵を出してコーカサス山南の地を略しトルコ帝國も亦チグリス河東の地を侵略した。然もマールムードの次王に至つてトルコと平和し露國も亦ピートル大帝が崩じたので一時東侵を中止した。間もなくベルシヤ人のナヂルと云ふ

英國の東印度商會

もの頻りにアフガニスタン人を破り遂にイスバハンを恢復してベルシヤ王となつた。時は我が紀元二千三百九十六年である。(支那は乾隆元年)ナヂルは勢に乗じて東の方ウヅベックを服しアフガニスタンに入つて頻りに其の威を振ひ乾隆三年には遂にムールガル帝國に侵入して大に掠奪を恣にした。ムールガル帝は婚を通じて僅かに平和條約を結んだ。以上は英國が印度を占領する以前の大體の歴史であるがこれより英國の印度征略を記るして見やう。ポルチユガルを初めとしスペイン、オランダなど何れも印度に手を着けて然も其の根據の確立せなかつたことは前に既に述べた通りである。英國は是れ等の國に次いで遂に印度の勢力を確立した。然もこれが確立に至るまでには其の強敵たる佛國と非常なる戰爭をなすの止むを得ざるものがあつた。我が紀元二千二百五十九年ロンドンの商人は印度貿易の爲めに英國東印度商會なるものを結んだ。翌年に至つて有名なエリサベス女王の許可を得これより英人は續々印度の地に航しオランダ、ポルチユガルの二國人と激烈なる鬭争をなした。これよ

りさき英國は有名なスペインのアーマダー艦隊を破つて一躍して二等國より一等國の列に入つて居つたからして東洋に於ける彼れ等の勢力も中盛んなものであつた。英人は南洋諸島に於てはオランダ人に敵せなかつたが大陸沿岸に於ては着々成效し先づムーガル帝國の許可を得てスラットを貿易場となし後にはマドラスを根據地としてボンベイカルカッタに商館を開き東印度商會の事業は着々として盛んになつた。初め英人は土地の侵略を後にして只管貿易の利を收めやうとしたが前に述べたマールタ同盟の起つてより貿易上の損害を受けることが多いのでチアイルドの東印度商會の重役となるに及んで初めて兵力に依つて根據地を安全にせんことを計り我が紀元二千三百四十六年新たに遠征隊を派遣した。これより英人は強敵佛人と戦はざるを得ざるの機運となつた。佛人は最も遅れて我が紀元二千二百六十四年より屢東印度商會を設立したが性急にして忍耐力に乏しい彼れ等は其の基礎を確立することが出来なかつた。然も其の根據地としたところのボンデシエリー及びシヤングルナガルは英

印度に於ける英佛

領のマドラスやカルカッタと接近して居たからして衝突は自然に避け得なかつた。其れのみならず歐羅巴の本國に於ても英佛の二國は當時交戦國であつたからして殖民地の印度に於ても二國人の感情は頗る悪かつた。第十八世紀の初めに至つてムーガル帝國は瓦解し諸侯は各地に割據するに至り佛人は南印度の計略を企て我が紀元二千三百〇一年有名なる佛人デュープレーのボンデシエリーの知事となるや佛國の態度は俄かに活潑となりラプールドンチの率ゐた艦隊はマドラスを襲うて之れを陥れられたにも拘はらず英軍は屢ボンデシエリーを攻めて其の功を奏せなかつた。然るに其の後歐羅巴に於けるエークスラ、シャバルの平和條約によつて佛國はマドラスを英國に返へしたがデュープレーは尙ほも佛國の勢力を張らんと欲し當時ムーガル帝國より獨立して都をハイデラバットに起したところのデツカンの領主の相續争に兵力を貸し遂に己れに加擔せるものに位を繼がせて漸く印度併呑の意氣を明かにした。爰に英國民は頗る不利の地に立ち將さに佛國の爲めに壓倒せられやうとするときに當つて

有名なるクライブなるものが出て英國の勢力を挽回することゝなつた。之れよりさきプロシヤのフレデリック大王が勃興して有名なる七年戦争の歐洲の天地に起つたために英佛の二國は又干戈相見ゆることゝなり印度殖民地に於ても我が紀元二千三百十六年に新たにベンガルの領主となつたスラジュードールは佛人に加擔して英人を悪くむこと甚だしく其の同族の相悪くむものがカルカッタに逃げたのを名として突然兵を率ゐて之れを襲ひホルトキリアムを陥れた。英人の多數は船で避難したが留守して居つた百四十六人のものは陋隘極まる營倉の中に幽閉せられ一夜の中に十中八九は窒息して死んだ。之れが有名なる暗窟の厄と云ふのである。クライブは當時東印度商會の手代であつたが此の殘虐なる事件を聞いて大いに怒りマドラスから走つてベンガルに行き翌年カルダッタの北方プラツシーの平野に於てスラジュードールの軍と相對し三千の募兵を以てスラジュードール及び佛國の同盟軍五萬を撃破した。之れよりカルカッタ附近に於ける英人の勢力は旭日冲天の狀を呈した。佛人は此の敗北の

ヘスチング
知事となる

コンウォール
の總督
時代

結果ベンガル地方に於ても志を得なかつた。其の後ヒュンシー及びラッリなど出で頻りに佛勢の恢復を計つたが英人ワシントン及びラッリに擒にせられ我が紀元二千四百二十一年(乾隆帝の二十一年)日本は家治の將軍となつた年(英軍は遂に佛軍の根據地なるボンヂシェリーを陥れここに佛人の印度に於ける勢力は殆んど全く地に落ちた。クライブの印度を去る頃にはガンヂス河の流域の威權は殆んど全く英人の手に歸して居つたが然も當時は東印度商會の役員は頻りに私利をのみ計つたので財政の爲めに將さに破産せんとするに至つた。こゝに於て我が紀元二千四百三十二年有名なるヘスチングがベンガルの知事となるやクライブの政策を改めて頻りに其の敏腕を振ひ一方に於ては東印度商會の財政難を救ひ一方に於ては土地の占領を確實にしたが後人の爲めに誹謗せられて本國に呼び戻された。ヘスチングに次いで英國の印度總督となつたものはコンウォールで彼れも亦文勳並びに武功があつた。是れより先きアフガニスタンはペルシ

ヤ王のナデルの征服するどころとなつたがナデルの死後アフガニスタン人のアーマドは獨立の旗を翻へし屢印度を征して北印度の大部分を侵略した。アーマドは當時ムーガル帝國の實權を握つて居つた彼のマールタ同盟をばハーニハットに擊破してムーガル帝を擁し以て北印度を號令した。然もアーマドの死後アフガニスタン人は内亂の爲めに印度を支配することが出来なかつたのでマールタ同盟は再び印度を支配することになつたが間もなく此の同盟は南北兩家に分れて互に相争つた。此の時に當つてナポレオン第一世は佛國の帝王となり歐洲を蹂躪した餘波印度に於ても北家を助け英國の勢力を奪はうとしたがウエレスレーの印度總督となるや佛國をして全印度の立脚地を失はしめたのみならず南家に加擔して北家を破つてゼンナ河上流の地を略取した。之れよりデルヒに於けるムーガル皇帝は全く英國の保護の下に餘喘を保ち英人の印度に於ける勢力は最早之れを争ふものがなくなつた。此のウエレスレーの武功と並稱するに足る文勳のあつた總督はダルフージーである。彼れは總督となる

總督ウエレスレーの時代

總督ダルフージー時代

總督カンニング時代

や只管心を内治に注ぎ或は運河を通じ或は鐵道を敷き或は電線を架し或は郵便の制を起すなど其の他教育、財政、司法など諸般の制度悉く改革せなむことにはないほどであつた。然しながら元來英國と印度とは常に利害の關係を異にして居るのみならず風俗習慣などに於て非常な相違があつたからしてダルフージーに代つて印度總督となつたカンニングの時代には有名なる土兵の一揆があつた。印度に於ける當時の軍隊は三十萬に足らなかつたが其の中で土兵の數は二十三萬にも達して居るし純粹の英兵は四萬五千ばかりであつた。初め英人の印度に勢力を得るや萬事に於て印度を英國化せねばならぬと考へ偶像に人類の犠牲を供することを禁じて耶蘇教を敷き夫の死した場合に妻の殉死する惡風を禁するなど其の他印度の風俗習慣を改めることが多かつたが元來風俗習慣なるものは歴史と感情の團塊であると云つても可いものであるからして人民の心に之れほど深い根を有つて居るものはない。従つて之れを變改さるゝほど其の國民の感情を激せしむるものはないのであるからして印度人は理非曲直の

別なく頻りに英人に對して怨を懷いた。就中豚は回教徒たる土民の最も厭ふものであるのに流言をなすものは久しからずして英人は土民に向つて豚を食ふことを強ゆるであらうなどと稱して頻りに人民の心を騒がしたからして英國の爲めに権力を奪はれた舊來の王君と酋長とは好機逸す可からずとなし密かに檄を四方に飛ばし土民は勿論英人の爲めに訓練された土兵の心まで動かしたからして彼れ等は一時に立つて叛旗を翻へした。其の勢いは凄いものでベンガル政府の下に支配された土兵の謀叛ばかりでも二十七ヶ所の鎮臺に及んだ。其の最も重なる戰場を擧げて見ると第一はミラットで此の地に於ける土兵と英兵との戦には英兵は素より衆寡敵せないで大いに打ち破られ且つ此の地に住んで居つた英人の家族は悉く土兵の爲めに屠られた。時は我が紀元二千五百十七年、井伊侯が老となつた安政四年のことである。其の他デーリ、カンポールなど何れも土兵の打ち破るところとなつて多くの英國人は虐殺せられた。然も英の有名なる將軍ハヴェロックの出づるに及んで僅かに二千の手兵を率ゐて

カンベル將軍

ムールガル帝國亡ぶ

印度全體英政府の直轄となる

頻りに土兵の軍を破つた。此のときラックノーも土兵の圍むところとなつて陥落旦夕に迫つて居ると云ふことを聞いたからしてハヴェロックは兵を移して之れを救ひ一時能く其の圍を解いたが敵兵は折り返へして押し寄せ來りハヴェロックの軍隊を合せて之れを圍むこと二ヶ月さすがのハヴェロックも將さに餓死するか或は虐殺さるゝか二者其の一を選ばざる可からざるの悲境に陥つたが恰も好し彼のクリミヤの戦に雄名を轟かしたカンベル將軍印度の總督となり五千の精兵を率ゐて來り助けたからしてラックノーの圍は漸くにして解かれた。時に我が紀元二千五百十七年の十一月である。此の亂にムールガル皇帝のシャアラム第二世も加擔したと云ふので英國は其の領土を奪つて緬甸のラングーンに幽閉した。彼のアクハルがムールガル帝國を建て、から三百〇二年で印度に於ける蒙古帝國は全く滅亡したのである。此の亂の後英國は國內の一刷新をなし從來東印度商會の名の下で半公半私的に印度を治めて居たのを我が紀元二千五百十七年全く會社の手より統治權を奪ひ印度全體を英國政府の

直轄となし英國内閣に印度事務大臣なる一椅子を置き實業の振興制度の改革、教育の普及などあらゆる方面に改良を施して土民も次第に英國に懐くに至つた。其の後我が紀元二千五百三十七年即ち明治十年の一月一日を以てヴィクトリヤ女王は英國皇帝を兼ねて印度女帝の尊號を稱せられることとなり、こゝに多年の忍耐克己幾多の艱難と戦つた英國人は百五十六萬方哩の面積と三億萬の人口を有する大帝國とを全然所有することゝなつた。

英緬の交渉

英國が印度を全く其の掌中に握つたからには勢其の隣國緬甸と關係を生ぜざるを得なかつた。元來印度のベンガル地方はアラカルの地を経て緬甸に通じて居る。緬甸は我が紀元二千四百四十一年にポトアープラー王位に即いて暹羅の内亂に乗じてアラカルの地を下し次いで暹羅を侵した。がフアヤチャツクリの爲めに大敗し却つてマルクハンの地を略奪せられた。アラカンの人民は之れを好機として獨立せうとしたが勢が足らなかつたのでベンガル地方に逃れた。緬甸兵は之れを追撃してベンガルに侵

入したのでこゝに英國は緬甸を侵す口實を得た。當時アツサム地方に内亂があつて緬甸王のポドアープラーは之れを助けると稱してアツサムの地を占領した。そこでアツサム王は又助を英國に乞うたので我が紀元二千四百八十四年英緬二國の間に戦争を生じ緬甸は全く敗北してアツサムアラカン其の他の地方と二百萬ポンドの償金とを出して和を請うた。然も其の後緬甸人は屢英國に對して怨を晴らさんと欲し其の度毎に益國力を弱めたが我が紀元二千五百四十五年に至つて英國は遂に緬甸を亡ぼして其の土地を擧げて印度の屬州となした其の後マレー半島に於ける諸國も聯合國を組織して英の保護國となつた。

第六節 阿片戦争並びに佛露と支那との關係

英國の印度を略奪するや盛んに其の地に生ずる阿片を清國に輸出した。支那人は之れを嗜むこと非常だから政府の嚴禁するにも拘らず阿片の密輸入は盛んに行はれた。然も之れが爲めに國民の體格は非常に悪しくな

英國より阿片を密輸入す

林則徐阿片
禁止令を勵
行す

阿片戦争

るので乾隆帝の孫宣宗即ち道光帝のときに至つて断然たる處置を施さんと欲し我が紀元二千四百九十九年(天保十年)剛直なる林則徐を兩廣總督となし廣東に赴いて阿片禁止令の勵行を爲さしめた。彼れは豫てより外國人の販賣を憤ること甚だしき人物であつたからして廣東に赴任するや直ちに改めて阿片の輸入を嚴禁するの旨を布告し次いで當時の英國廣東領事エリオットに對して英人の密輸して居る阿片の總額を三日間に支那政府に提出すべきことを通じた。エリオットは最初僅ばかりの阿片を提出したが林則徐の許さないとところからして遂に其の全額二萬餘兩を提出した。林則徐は直ちに之れを焼き拂ひ尙もエリオットに向つて阿片を密輸入した商人十六人を支那政府に引き渡せと追つた。エリオットは之れを怒つて在留の英人を率ゐて廣東を引き拂ひ澳門に赴き直ちに右の始末を英國政府に報告した。英國はブレメル將軍に十五隻の軍艦と四千人の兵とを率ゐしめて支那に派遣しこゝに英清二國の間に一ヶ年に亘るの戦争を惹起した。然も當時の支那兵は文明的に訓練せられた英兵に敵するこ

批評

どが出来ないからして連戦連敗英軍は先づ舟山列島を占領して之れを海軍の根據地となし頻りに海陸の増援隊を以て海岸は勿論内地に至るまで攻め入つた。そこで宜海、鎮海、厦門、寧波、上海の各地は皆陥り清國は到底之れに敵することが出来ないと思つたからして媾和使を發し南京條約を結んで清は英國に對して二千百萬兩の償金を出すこと。廣東厦門上海寧波福州の五港を開放すること。香港を英國に割讓することの條件で局を結んだ。時は我が紀元二千五百〇二年である。此の戦たるや無論道理上から言へば英國の非理非道なることを叫ばねばならない。阿片が人身に害を及ぼすことは最も明かなことであるからして清政府が其の國民の爲めに之れを嚴禁したのは最もなことである。然し英國が道德的に清國に對したならば清政府を助けて其の密輸入を禁すべきである。然るを却つて商人に興みして此の害毒物を益清國に輸入して顧みないことは世界人道上無論罪惡の甚だしいものと言はねばならない。然しながら自國の利益を唯一の目的とせる當時否現世界に於ては正理は必ずしも勝利を得るもので

た。然しながら露人の目的は寧ろ通商よりも土地の侵略にあつたからして其の後常に好機の來るを覗つて居つた恰も好し支那の勢力は漸々衰弱に及んだからして我が紀元二千四百八十年の頃より露西亞はコサツク兵を派遣して黒龍江沿岸の地を探險せしめ二千五百十一年(文宗の咸豐元年日本の嘉永四年)黒龍江の源流に遡つてニコライヴスク及びマルンスクの二府を建て其の後蒙古側の沿岸にアレキサンドロヴスクとコンスタンチンヴスクとを建てた。當時の露西亞皇帝は例のニコラス第一世である。支那政府は是れ等露國の侵略を尤めたところガシペリヤ總督コラヴィエフは是れ等は支那貿易の必要上建てたところであると答へて平氣であつた。間もなく有名なるクリミア戦争起り露國の黒海は英佛の聯合艦隊に封鎖され之れがために東洋貿易の海路を失つたからして露國は續々兵を出して黒龍江の北岸を征し支那政府の故障を耳にも入れず遂に我が紀元二千五百十八年(即ち文宗八年)我れの安政五年家茂の將軍となつた年)清國を壓迫して愛爾條約を締結した。其の結果露國は黒龍江の北岸の大地面

を奪つた。其の後イグナチエーフの支那の爲めに英佛二國の間に講和の勞を取るや其の周旋料として又露清條約なるものを締結し滿州の沿岸ウラジホストツクより朝鮮の境に至るまでの土地を得た。其の勢力扶植の迅速なることは實に驚くべきものであつた。

第七節 長髮賊

我が紀元二千五百十年宣宗道光帝は二月を以て熱河に崩じた。此の年の六月即ち我が嘉永三年に有名な長髮賊の亂が起り爾來我が紀元二千五百二十四年支那は文宗を経て穆宗の同治三年(我が元治元年)に至るまで十六年の久しきに亘る間續いた。初め朱九濤なるもの自ら明室の後だと稱して耶蘇教を奉じ三點會を設けて愚民を惑はした。長髮賊の張本たる洪秀全は同邑の馮雲山と共に之れを師とし九濤の死した後洪秀全は衆に推されて三點會の教主となつた。其の後洪秀全は廣東在留の米國宣教師ロバートの教を受けた。間もなく洪秀全馮雲山の二人は廣西に至り桂平、武宣二縣の境にある鵬化山中に居を占めて近傍の人民の感化に努めた。楊秀

洪秀全三點會の教主となつて人民を感化す

洪秀全叛旗を擧ぐ

清石開遠、蕭朝貴等後に長髮賊の一方の大將となつたものは皆此の時に教へに入つた。洪秀全は曾つて病んで將さに死なんとした。幸にも病の愈わつた後彼れは詐つて云ふには病死七日にして蘇生し能く未來のことを知ることが出来るやうになつた。是れより彼れは一方には宗教上の改革を唱へ一方には政治上の改革を唱へて滿州政府を覆さんと欲し廣西に於て叛旗を擧げ天帝を以て父となしクリストを以て兄となし自己はクリストの弟で其の信徒は皆兄弟姉妹と呼び自ら教主兼革命者として打つて出た。滿州政府に快からざる所のは良民たると山賊たるとの別なく皆立つて之れに與みし忽ちにして大なる軍隊を得た。そこで四方に遊説者を出して人民を誘つたが其の遊説者が皆長髮を蓄へて居たところからして此の亂を長髮賊の亂と云ふのである。洪秀全は先づ永安州を取つて之れに據り國名を太平天國と稱し自ら天王と唱へ頻りに官軍を撃破して揚子江一帶の地を席卷し南京を陥れて之れを根據とするや制度法律悉く歐米に模し婦人の交際を開放し蓄妾の弊風を禁じ娼妓を廢して結婚式

秀全、太平天國の天王と稱し歐洲の制度法律を模倣す

曾國藩賊を討す

を歐風に改め養育院を初めとし種々の慈善事業を起し戰爭中といへども基督教を弘めることを怠らなかつた。滿州政府は驚くのみで殆んど之れを如何ともすることが出来なかつた。そこで各地に義勇兵起つて之れを郷勇と稱し各自己の土地を保護することを努めた。此の郷勇を率ゐた有名なる人物が彼の曾國藩である。曾國藩は官軍を合せて左宗黨と共に湖南湖北に轉戦し頻りに其の勢力を振つたが然も支那の中部は長髮賊の横行濶歩するところとなつて容易に手を着けることが出来なかつた。間もなく英佛聯合軍が頻りに北上して來たからして清國政府は内外共に敵を受けて將さに滅亡せうとした幸にも歐米人が長髮賊に向つて戦ふに及んでこゝに滿州政府は辛くも其の命脈を維持することが出来た。元來洪秀全は其の初め頻りに歐米の文物制度を模しクリスト教を弘めることを以て本旨としたからして英米を始めとし其の他の歐洲諸國も之れに賛同して好意的の局外中立を守つた。洪秀全の師なるロバートの如きも彼れの招きに應じて南京に赴いたが當時の洪秀全は其の擧兵の初めとは大に心

洪秀全購つて歐米の同情を失ふ

李鴻章等能く戦ふ

驕り自らが救世主であるが如くに振舞ひ自己の説教を新福音などと稱することがあつたからしてロバートなどは大に失望した。加之長髮賊の一隊は上海を襲ひ頻りに略奪を行つたからしてこゝに居住せる歐米人民は止むなく自衛の道を講じ官軍を助けて長髮賊に當り更に支那人を訓練して洋式の兵となし以て賊軍に當つたからして長髮賊は上海を陥るれしもの、其の勢は始めの如く盛んでなかつた。間もなく官軍の將李鴻章及び劉銘傳等皆能く戦ひ賊勢次第に沮喪した。加之英佛の諸國は北京條約などに依つて自己の得んと欲するところのものを得たからして早く支那を平和の國となし以て貿易上の利益を攫取せんと欲し滿州政府を助けるに一決し陸海軍を發して賊軍を討じたからして賊軍は至るところに敗走した。殊にゴルドン將軍が常勝軍と稱せられた洋式の訓練兵を指揮するに至つて向ふところ敵なく破竹の勢を以て賊軍を討ち破つた。之れと同時に南京の方面に於ては曾國藩の弟曾國荃頻りに諸城を拔き遂に金陵を圍んだ。さすがに之れは容易に抜けなかつたが北清に向つたところの賊

英佛軍滿洲政府を助く

長髮賊亡ぶ
洪秀全に關する批評

軍も外人の爲めに大打撃を受けて次第に退き南京も亦重圍に陥り没落旦夕に迫つたからして賊帥の洪秀全は毒を仰いで自殺し長髮賊の亂はここに平定することゝなつた。想ふに長髮賊にして其の初めの志を改めないで長く歐米人の同情を買ひ以て滿州政府を覆へして支那の改革を呼號したならば當時の歐米の勢力は未だ今日の如く甚だしいものでなかつたからして支那の改革も意外に容易に出來たであらう。然るに彼れは一國を支配する大才でなかつた爲めに支那改革の好機を失し遂に今日に至るまで漸々腐敗に腐敗を重ね然も如何ともすることが出來なくなつたのは支那の爲めに誠に惜しむべきことである

第八節 中央亞細亞に於ける清

露英の關係

先きに乾隆帝のときに當つて清は天山南路を平定したが其の後清國の勢萎微振はざるに及んで此の地方漸く亂れ道光帝の時代に至つてコーカンドのマダリ汗なるもの清帝が回教徒を虐待するのを憤つて天山南路に侵

清とマダリ汗との交渉

清ミトシガ
ン族との交
渉

入しカシユガル、ヤールカンド其の他の地方を占領した。マダリ汗は其の後間もなく清軍に破られ之れに與みした回教徒はイリー地方に移された。然し其の後マダリ汗は再び起つてカシユガルなどの諸地方を陥められて勢猛烈であつたからして清國は到底之れを根本的に平定することが出来ない。これより天山南路の回教徒は少しく靜穩に歸したが然も清國の回教徒の憂は未だ去らないで河西の回教徒なるトンガン族は當時清帝が内憂外患に苦んで居るのを好機となし我が紀元二千五百二十二年に亂を甘肅省に起した。アクス、バラシヤルなどの回教徒も皆之れに應じた。ブズルグなるもの之れに乗じてコーガンドの助を得次てカシユガルを陥められたが其の部將ヤクブの爲めに廢せられヤクブ代つて其の士卒を率ゐ先づトンガン族を服従せしめ都をアクスに定めて殆んど天山南路の地を一統し使を英露兩國に遣はして獨立國の承認を求め又土耳其帝國に向つて後援を乞ひ極力清軍と相對抗した。清軍は屢回教徒の征討に力を用ひたが

露ミヘルシ
ヤミの交渉

内亂の後で兵氣沮喪して毫も其の功がなかつた。然るに我が紀元二千五百二十八年有名な左宗棠が陝甘總督となるに及んで清軍の勢俄に揚かり先づトンガン族を撃破した。恰も好し我が紀元二千五百三十七年に及んでヤクブは死んで其の諸子が互に勢力を争つて居るのに乘じて清軍は次第に西征し遂に回教徒の亂を鎮定することが出来た。初め回教徒の天山南路を騷擾するに當つてアブドラなるものイリーの回教徒を率ゐて叛亂を起したが露國は國境を維持することを名として我が紀元二千五百三十一年兵を出してアブドラを破つて其の地を占領した。間もなく清軍が回教徒を平定したからして清國は露國に向つてイリーの地を退去せんことを要求したが容易に之れに應じないのでこゝに清露二國の間に紛争を惹起した。

此の紛争を述べる前に當つて吾人は先づ露國がベルシヤ國並びにウツベクの三汗國を侵略した略歴を述べる必要がある。露國がベルシヤを狙ふとはピートル大帝のときに始つて居るのである。帝は我が紀元二千三百

露のウツベク侵略

八十二年を以て自ら軍を率ゐてアストラカンに進み尙もデルベルトに進軍したが不幸にして兵器糧食を載せた運送船が裏海に於て暴風に遇ひ沈没したからして止むを得ず軍を班へした。ポール帝のときに至つてジョールジャを露國の領土に入れ遂に我が紀元二千四百六十四年ベルシヤと兵を交へて大いに之れを破りグリスタン條約を締結して多くの土地を奪ひ且つベルシヤは裏海に艦隊を浮べるところの特權を捨て、悉く之れを露國に與へた。其の後二十二年にして二國は又兵を交へベルシヤ又破れて和を講じ土地の割譲と三十萬留の償金とを拂ひこゝに露國は裏海西岸の一帶の地を得て海上の支配權を掌握しベルシヤをして全く北上の希望なきに至らしめた。爾後露國はベルシヤを助けて只管之れをして英國に當らしめ同時に裏海の東岸に至るまで自國の勢力範圍を擴張し遂に我が紀元二千五百四十一年に至つてアトレク河と其の水源の山嶺を以てベルシヤ領のコラサンとの境界となした

露國のベルシヤに對する關係は大略右の通りであるが次ぎに述べねばならぬ

らぬことはウツベク三汗國の侵略である。ウツベクの三汗國と云ふのはブハラ、キワ、コーカンドの三汗國である。是等の三汗國は互に勢力上の競争を續けたが然も外敵に當る場合には彼れ等は唇齒の關係上互に救護するのを常とした。コーカンドがアク、メチエチ城を露國より取返へさんとするやブハラ汗は兵を出して之れを助けた。露國は之れを好機として南下の宿志を盛んにした。我が紀元二千五百二十四年に露將のチエルニャーエフはテムケントを陥れ翌年軍を進めてタシユケルトに及んだ。ブハラは此報を聞いて兵を出したが時宜に遅れた。然も露國に對抗するの態度を持續した。次いでロマノフスキーの露將となるや兵を増してブハラの軍を破りブハラとコーカンドとの境界地を占領して互に相救ふことが出来ないやうにした。元來英露二國は東洋に於て覇を争ふものであることは十九世紀の世界歴史に於て明かなることであるが之れに對する露國の最初の計畫は先づシベリヤ殊に黒龍江方面に勢力を張つて以て太平洋に打つて出でやうとしたのである。然るに端なくも中央亞細亞の經營

をなした諸將の結果が頗る豫想外に善いので初めて中央亞細亞より南下して以て英國の寶庫たる印度に侵入せんと志を生じた。そこで遂にトルコスタン省なるものを設置しカウフマン將軍を總督となしタシユケントを中心として南下の勢おさく、怠りなかつた。

さきに露軍がブハラとコーカンドの間なるホーゼンドの地を陥るゝやコーカンド王のホドナルは到底露國に敵することが出来ないと見て平和を請うた。そこでカウフマン將軍は屬國の禮を以て之れを遇し通商條約を締結した。之れと同時にカウフマンは此の屬國的態度を以てブハラ汗にも迫つた。ブハラ汗は前敗に懲りては居るものゝホーゼンド其他の要地を奪はれたことを怨んで居つたからして容易にカウフマンの要求に應じなかつた。のみならず密かに兵備を修めて軍隊をサマルカンドに送りカウフマンが露京に赴くの虛に乗じて兵を擧げやうとしたがカウフマンは之を察知して直ちに東征し大にブハラ汗の軍をゼラフシヤン河畔に破りサマルカンドに入り進んでブハラを圍んだ。ブハラ汗のムザフアルは

助けを印度の英人やアフガニスタンなどに求めたが目的を達せなかつたので遂に我が紀元二千五百二十八年(支那は穆宗の同治七年我れの明治元年)左の條件を以て講和した。第一はブハラ汗國は露國の保護國となること。第二はサマルカンド以下露軍の占領した土地を讓與し且つ五十萬留の償金を出すこと。

ウヅベク三汗國中既に其の二國は露國の爲めに打撃せられた。残りはキワ汗國のみである。我が紀元二千五百三十二年露國はさきにキワ汗國が露の隊商を殺掠したことを口實として將軍マルコロフをして膺懲の軍を率ゐさせたが却つてキワ汗國の兵の爲めに破られたので翌年カウフマン將軍は自ら將とし大に裏海タシユケン、シールダリヤの兵を發し遂にキワを陥れた。そこでキワ汗のホドカルは左の如き條件を以て媾和するの止むを得ざるに至つた。第一はキワ汗は露帝に隸屬し其の許可なくしては他國と宣戰媾和することは出来ないこと。第二はアラル海と裏海との間並びにアムー河北の地を露國に讓與し償金二百二十萬留を出すこと。

露清の交渉

此の戦に於てブハラ汗は多くの駱駝を出して露軍を助けたからして其の功に依つてオクサス河右岸の土地を得た。

右の如く露國は既にウヅベクの三汗國を壓服したも、元來が勢力の敵せないために一時之れに従つたのであるからしてコーカンドの如きは其の後屢露國の商人などを殺した。そこで我が紀元二千五百三十六年に至つて露將のスコベレフは遂にコーカンドを亡ぼして其の地を露國の版圖となした。之れよりさき我が紀元二千五百年の頃露國はイシクル附近に散在して居たキルギス族の一部を征服したからして露國の境域は直ちにイリに接觸することゝなつた。さればこそ前に述べた如く回教徒の叛亂に乗じて露軍がイリを占領したのである。然も左宗棠の天山南路を恢復するや頻りに露軍にイリ退去を要求したが狡猾なる露西亞は容易に其の要求に應じないので露清二國は將さに干戈の間に相見わんとするに至つたが幸に我が紀元二千五百四十年(支那の光緒六年、我が明治十三年)イリ條約なるものを結んで落着した。其の條約に由ると清國は九百

英のアフガニスタン侵略

萬留の償金を支辨すること。イリ河の支流たるコルゴス河の東の地を清國に還附し其れ以外の地を露國の版圖となすことなどが規定せられた。

かくの如く露軍は中央亞細亞に於て頻りに成功したからして其の南國の意志は益盛んとなりメルブがさきにキワの領地であつたと云ふことを口實として之れを併呑したのでこゝに英露二國の間に衝突を惹起した。

初め英國は露國の勢力の頻りにペルシャに揚るのを見て我が紀元二千四百九十二年以來屢パーンスなどをウヅベクの三汗國に遣はして英國と同盟せしめやうとしたが容易に其の勸告に應じなかつた。間もなく英國がアフガニスタンに失敗したからして此の計畫は終に成らなかつた。我が紀元二千四百九十六年に於てアフガニスタン國には革命があつて其の國王のシャジュジャは逐はれて印度に逃れドスト、マホメットなるもの其の國を奪つた。時に露國はペルシャを勢力範圍に歸したからして之れを好機としてアフガニスタンをも併呑せんとする勢があつた。時の英領印度總督オー克蘭ドはアフガニスタン王のシャジュジャの自國に逃れ來た

のを口實となし我が紀元二千四百九十八年ドスト、マホメットに向つて宣戦を布告し大兵を發してドスト、マホメットを逐ひシヤ、シユジヤを王位に復し首府のカブールにはマクナーコンを全權公使として殆どアフガニスタンの政權を掌握せしめた。然るに我が紀元二千五百〇一年の冬アフガニスタンの酋長等は密かに集會を開いて四方並び起つて外國人を掃蕩することを決し不意に起てカブールを占領し更に印度より派遣されて居た英の軍隊を圍んだ。マクナーコンハ如何ともすること能はずドスト、マホメットの子アクベル汗に講和の條件を定めやうとして往つたが直ちに殺されたので更に使を馳せて一切の財産は悉く之れを譲り渡し大砲も六門の外は凡べて之れを與ふることゝして漸くに印度に退却することを許された。そこで英國兵五千人弱と二千ばかりの非戦闘員とは退却を初めたがアフガニスタン人は之をカイベル谷に要撃して悉く之れを虐殺した。英國は直ちに救助軍を出してアフガニスタン人を討ち遂にカブールを占領したが然も根本的にアフガニスタンを壓服することの困難なことを洞

アフガニスタンに於ける英露の交渉

察したからして民望に副うてドスト、マホメットをアフガニスタン王となした。時に我が紀元二千五百〇二年で實に英國の大失敗と言はねばならぬ。斯くの如く英國がアフガニスタンに忙はしい間に露國はウヅベク三汗國を亡ぼして次第に南下して來たから英國は百方之れが防禦に努め我が紀元二千五百二十九年、印度總督のメーヨはドスト、マホメットの子シエルアリと同盟を結んで露國に當ることゝした。然るに其の後シエルアリが其の子のヤークブと争ふに當つて英國は密かにヤークブを助けたからしてアフガニスタンと英國との交情は舊の如く濃かでなくなつた。露のカウフマン將軍は好機逸す可からずとなし使をカブールに遣はしてシエルアリと攻守同盟を締結した。是に於てシエルアリは頻りに戦闘準備をなし英國の使者を拒絶したからして印度總督リットンハ遂ニシエルアリに對して開戦を布告し頻りにアフガニスタン軍を破つてジエラウハット及びカンダハールを陥れた。シエルアリは前の盟約によつて露國の援兵を請

うたが狡猾なる露國は之れに應じなかつたので遂に中央亞細亞に逃げて死んだ。因つてヤークブアフガニスタン王となり英國と和を結び其の國東部の地を英國に讓與し且つ以後は英國の承認なくして宣戰講和せざることを約した。時に我が紀元二千五百三十九年である。然もヤークブは後に至つて約束に背き英人を虐殺したからして英國は其の王位を奪つて其の從兄を擁立し年金十二萬磅を與ふることゝして前の約束を履行させた。此の時に當つて露國は既にキワを降しメラルプを占領し尙ほも進んでアフガニスタンの西北境に侵入してヘラットに迫つたからして英國はアフガニスタンを助けて異議を提出し英露二國は頻りに委員を派して境界問題を議させたが一致せないので殆んど開戦せうとしたが我が紀元二千五百四十七年に至り英國が幾分の讓歩をなして平和の局を結んだ。之れよりさき英國は露國に説いてアムール河上流の地をアフガニスタンの版圖と確定したが其の時にパミール方面の境界問題を確定して置かなかつたためにヘラットの問題の片付くと共に又此の方面の境界に付いて爭論を生

じた。然し戦争を見るに至らないで我が紀元二千五百五十五年に平和に局を結んだ。

第九節 佛國の南方亞細亞侵略

佛の安南侵略

英國と印度を争つて全然失敗した佛國も安南暹羅の方面に於ては可なり成功をなし兎も角も亞細亞に其の根據地を得た。安南は歴支那の屬國たるが如き有様にあつたが清の時代に於ても之れに羈束されることが多かつた。然も清政府の勢力が振はないやうになつては殆んど一獨立國たるが如き有様であつた。ところが我が紀元二千四百四十年頃に内亂が起つて其の一方の大將たる嘉劉王なるもの大敗して佛國の助を借ることゝなつた。之れより先き印度より安南に渡つて傳道して居たところのゼスイスト僧のビニョーなるもの嘉劉王に勸めて佛國に依頼することの利益なることを以てしたからして王はビニョーと共に其の子を佛國に遣はし以て之れが援助を請うた。佛は成功の曉には化南郡と崑崙島とを得るの約束を以て直ちに軍艦二隻を派遣して嘉劉王を助けた。爲めに王は大に

敵軍を破り順化府を復し我が紀元二千四百六十二年に至つて遂に敵王阮光を東京に攻め亡ぼし安南一帯の土地を恢復して自ら帝王と稱した。此の時に當つて佛國は例の大革命の最中であつたからして安南に向つて先きの要求をなすの暇がなかつた。其の後革命の餘炎漸く治まるに及んで屢前約履行のことを安南に迫つたが當時嘉劉王は既に死んで青年客氣の輩のみ政府に居つたからして管に前約を履行せざるのみならず大に攘夷の氣焰を發し宣教師やクリスト教徒を或は放逐し或は殘殺するなど亂暴を極めたからして佛國は我が紀元二千五百〇七年に至つて遂に軍艦を派遣して安南の戰艦を擊破したナポレオン三世の佛國の政權を握るや益安南征討の志を決し西班牙と同盟した。それは西班牙の宣教師も安南人の爲めに殺されたからである。そこで兩國の軍は二千五百十八年を以て先づツローンの港を陥れ次いで柴棍を占領して、こゝに佛西聯合軍の根據を置き向ふところ敵を見ない勢を以て安南の内部にまでも攻め入つた。之れに加ふるに東京に於ても安南政府に叛旗を翻すものが起つたから

佛の東京征服

して安南は絶體絶命、二千萬フランの償金と三州を割讓して平和を結んだ。實に我が紀元二千五百二十三年のことである。安南に於て既に甘き味を知つた佛國は次ぎに東京を窺つた。當時佛人のジユビユイなるもの屢東京より雲南の間に往來して此の地方の物産に富んで居ることを知つて居たからして之れを佛國の領土となさんと欲し我が紀元二千五百三十三年佛國の軍艦と共に紅河を遡つて其の近傍を探險した。東京政府は之れを拒絶したが一向平氣で探險を遂げた。因つて東京政府は之れを柴棍の佛國知事に訴へたからして知事は海軍大尉ガルニエーを遣はして便宜事を處せしめしに彼れはジユビユイの目的に賛成し紅河通航の許可を東京政府に請うた。東京政府は之れを許さなかつたからして彼れ等は亂暴にも河内城を攻めて之れを陥られた。東京政府はさきに長髮賊の一部として有名なる黒旗兵に助を乞ひガルニエーを打ち殺した。柴棍なる佛國知事は大に驚いて使を遣つて一旦ジユビユイを海防府にまで退去せしめた。因つて安南も亦大に驚いて佛國と新條約を結び

其の結果、紅河の通航を許し、河内以下三個の居留地を東京に設け、百名以下の守備兵を置くことを許し、安南の外交事務は佛國の監督の下に置くことにした。然し佛國は此の條約の制限を顧みないで、續々守備兵を居留地に送つた。東京政府は俄かに之れを拒んだからして、佛軍は直ちに河内を砲撃して之れを陥れた。そこで東京政府は又黒旗兵の大將劉永福に助を求めた。劉永福は討つて佛軍の大將リヴキエルを殲じた。之れを見たる安南も亦佛國の力を弱めんと欲し、雲貴總督の軍と合して佛軍を東京に討つた。時に佛國海軍司令長官クールペーは安南が支那や東京を助けて居ることを探知し、海防府より來つて順化灣を陥れたから、安南政府は大に恐れて和を乞うた。そこで佛國は安南を保護國となし、支那との交際も佛國の許可を経ねば何事をも爲す可からずとした。支那政府は之れを聞いて大に憤り、益兵を東京に出し、劉永福を東京大臣に任じ、將き公然佛國に對して開戦を布告しやうとした。佛國は少しも之れを顧みず、直ちに山西を陥れ、北寧に進んで清軍及び黒旗兵を撃退し、益内部に進入せんと企て

たので、清國も大に恐れ、李鴻章を遣はして天津で平和條約を結ばせた。其の結果以後、支那は佛安條約に對して容喙せざること、東京派遣の兵を呼び戻すこと、支那の南境に通商を許すことゝなつた。實に我が紀元二千五百四十五年のことである。こゝに於てか、佛國は東京の經營に力を盡さんと欲し、曾つて陥れたところの諒山鎮の占領を確實にするが爲めに進軍したところが、清軍が俄かに此の佛軍に抵抗したからして、こゝに一場の戦争を生じ、佛國は清國の違約を責めて償金を要求した。然も要領を得ないので、クールペーは直ちに艦隊の一部をして臺灣の基隆港を占領させやうとしたところが、當時此の島には有名なる劉銘傳が居つたからして、佛國の兵の上陸するものを防いで、其の目的を達せしめなかつた。因つてクールペーは福州灣に至り、支那の軍艦十一隻を撃破し、又臺灣を封鎖した。かくの如く、海軍の方面では佛國の勢は全く清國を壓したが、清國の臺灣の陸兵は頗る能く防いだので、陸軍に於ては佛國は其の目的を達することが出来なかつた。時に佛國政府の方針變更し、クールペーに對して十分なる援

安南東京佛の有となる

兵を送らなかつたからクールベールは憂憤の餘り澎湖島に病死した。東京地方に於ても黒旗兵が能く戦つたので十分なる目的を達することが出来なかつた。間もなく佛國內閣の交迭となり戦闘を中止することゝなつて更に清佛條約を結び漸くに安南と東京との主權を獲得することが出来た。時に我が紀元二千五百四十七年即ち光緒十三年明治二十年のことである。

佛暹の交渉

安南東京既に佛國のものとなる。隣國なる暹羅は如何。佛國宣教師の盡力に因つて暹羅王モンカットは我が紀元二千五百十五年に英國と通商條約を結び次いで佛米とも條約を結んで開國進取の氣運を開いた。其の子クラロンコールも聰明の君で父の志を繼いで頻りに歐米の文物を輸入し制度、法律、教育の改正をなし着々として國家の進運を助けたが既に安南東京に志を得た佛國は暹羅に於ても又志を得やうと欲し我が紀元二千五百五十三年即ち明治二十六年に暹羅に迫つて云ふにはメコン河左岸の地は曾つて安南の領地であつたから之れを返還せよと。暹羅は正當な理由を

提擧して之れを拒絶した。しかも野心勃勃たる佛國は道理に服するものではないから問もなく一軍隊を派遣してメコン河左岸の暹羅兵を逐うて其の土地を占領した。これより二國の間に戦端を開いたが佛國は着々勝利を占め軍艦を盤谷附近にまで進むるに至つた。暹羅政府は止むを得ず十萬方哩の土地を割きメコン河の左岸は全く佛領となつた。是に於て英國は暹羅の隣國緬甸を支配して居るところからして佛國に對して故隙を申込んだ。そこで英佛二國は協議の上二國の領土の間に中立地を設けることゝして局を結んだ。

第十節 元明清の學術と宗教

一、學術

(一) 經學 元は元來漠北に起つた野蠻人であるからして其の最初は文字すら有せなかつたが世祖のときに至つて姚樞の勸により宋の學者を招いて太極書院を建て許衡等をして大に程朱の學を唱へさせた。吳澄は之れに反對して陸象山の學を唱道し二人ともに元代の大儒として推重され

た。明に至つて太祖は大に學問を興隆し創業の臣中にも劉基、宋濂などの大學者もあつたが其の宗とするところは程朱の學である。成祖のときに及んで學問益盛んに有名な四書大全、五經大全、性理大全などを編纂して以つて諸國の學校に配布させた。然も明の經學は程朱派ばかりではないので有名な王陽明の學も中々盛大であつた。そこで結局明の經學は河東派と姚江派との二派に分れた。河東派は薛瑄を宗となす。薛瑄は程朱の學を重んじ曾つて曰く朱子より後は斯道大いに明かなれば著作を用ふるなし。唯躬行すれば可なりと。されば此の派に於ては別に朱子よりも一歩進みたる學説をなすものはなかつた。姚江派は有名なる王陽明即ち王守仁を宗となす。彼れが武宗世宗の時代に當つて屢武勳を立てたことは前に述べたが彼れは又學問に於ても實に明代第一の學者である。無論彼れの學は陸象山の説を祖述したのであるが河東派の薛瑄が程朱學を繼述したのとは大に其の趣を異にし陸象山の學に數等の進歩を加へたものである。彼れは良智良能を根本となし主觀的の修養を重んずること禪宗に類

するものがある。謂はば佛教の宗教的方面を避け之れを修身處世の實際上に應用したものと云つても可いのである。斯くの如く支那は宋より以來頻りに理論の方面にのみ其の經學が馳せたので之れを漢唐時代の註疏學に比すると時に徒らに空想に走るの嫌も多かつたからして其の反動として清初に至つては大に考證の學が起つた。無論考證の學は明末に既に其の基を開いて居たのであるが顧炎武に至つて非常なる發達をなした。彼れは明の遺臣で清には仕へないで専ら著述に従事し學問該博考證精確其の著述たる日知錄、天下郡國利病書、韻學五書などは頗る價值のあるものである。此の他、閻若璩の古文尚書疏證、詩書釋地などの如き毛奇齡の春秋毛氏傳の如き最も著明なものである。然しながら清の考證の學は精粗の差こそあれ漢唐の註疏の學と其の説を一にするもので謂はば學者研究の材料たるも積極的に學説の進歩を徵し得るものではない。故に支那の經學は未明を以て其の極に達したものと假定せねばなるまい。

(二) 史學

金元時代には特記す可き程の史書は著はされなかつた。明

清時代には史學に關する著書は随分多かつたが今其の中で重要なものを擧げると記傳體のものでは宋濂等の元史張廷玉等の明史などが有用である。編年體のものでは清の畢沅の續資治通鑑御批通鑑輯覽など最も名高い。又記事本末體のものでは明の陳邦瞻の宋史記事本末及元史記事本末最も善著である。清の趙翼は支那古來の歴史家中最も史眼の超絶したもので其著二十二史劄記及亥餘叢考は最も史學に益ある著である。

(三)文學 金元の際に出でた文學者中で最も卓絶せるものは元好問である。彼れは管に金元時代第一の文學者たるのみならず宋朝の蘇東坡と比肩するに足るものである。元好問字は裕之、號は遺山と云ふ。彼れは詩文共に絶巧で其の作は多く支那文學の特色たる沈鬱悲壯の調を帯びて居るが然し其中に一種清新の氣が存して居る。彼れの作中最も有名なものは文では雷希顔墓銘で詩では湘夫人詠、泛舟大明湖などである。遺山に次ぐものは趙孟頫字は子昂で子昂は管に詩文の名手たるのみならず書畫に於ても實に當時代第一の人。

支那文學は宋元の際に至つて始めて戯曲及小説を見るに至つた。即ち戯曲は宋の末より漸く起り元時には南曲、北曲の別をさへ生じ南曲では高則誠の琵琶記最も名高く北曲では王實甫の西廂記が最も名高い。小説は元に至る迄は別に見る可きものはなかつたが施耐庵の水滸傳出づるに及んで頗る其勢力を文壇に得るに至つた。此書結構壯大、文章精妙、實に千古の珍書である。

明に至つて八股文(八股文とは經義の文又は時文と稱するもので當時の朝廷で官吏採用の際に用ふる應試文である)大に行はれた爲めに文章は凡て鑄型的形式的となつて生氣の滾々たるものなく一代を通じて唐宋大家に比肩するに足るものを一人も出さなかつた。只李東陽及李夢陽の二人は共に擬古文を作つて一代を風靡した。此二人より前に出たもの、中では宋濂、劉基、方孝孺、高啓などが名高いし後に出たもの、中では李攀韻、王世貞、天慎中などが名高い。

清初の文は侯方域、魏禧を以て翹楚となす。侯方域は韓柳を宋とし魏禧は

蘇老泉を學び共に一新機軸を出した。二家に次では汪琬、朱彝學、顧炎武などが名高い。又詩に於ては錢謙卷、吳偉業先づ出で二家に次で王士禛出で康熙、雍正の間五十年間詞壇の牛耳を執つた。同時に朱彝學等あり、王士禛と併稱された。二家の外に有名なものは宋琬と施閏菴とで南施、北宋と併稱された。乾隆時代には袁枚、蔣士詮、趙翼の三家出で、時人に重んぜられた。戯曲、小説は元以後益發達した。先づ戯曲に於ては明の陽顯祖の牡丹亭返魂記、清の孔東塘の桃花扇、傳奇、洪昉思の長生殿傳奇、李漁の笠翁十種曲、蔣士銓の紅會樓九種曲など最も有名である。又小説に於ては明に西遊記、金瓶梅あり、彼の水滸傳、演義三國志と共に後世四大奇書と稱せらる。清朝では紅樓夢、兒女英雄傳など最も名高い。

二、宗教

(一) 佛教 元は管に朝廷其れ自身が始めより佛教を尊信したるのみならず西域地方を征定するに及んでは佛教の力を借て其民心懷柔策に供した。實に元室の佛教を重んじたことは他の時代に多く其比を見ない程で

僧侶を敬して帝師と號し之れに土蕃の地を領有せしめ帝師の命令は詔勅と同じい程の權力を有して居た。又天子の即位する時には帝師の戒律を受け后妃公主と雖も皆之れを膜拜した。特に世祖に尊信された八思巴の如きは古來其類稀れなる權勢を有したことは前に述べた通りである。明朝も太祖を始めとし成祖、武宗など何れも佛教を尊信した。太祖の世には名僧を選んで諸王に體せしめ成祖は哈立麻を尊信して天下の佛教を總管せしめ又南北兩京に詔して大藏經を印刷させた。武宗も自ら大學法王と稱して喜ぶ程に佛教を信じた。然るに世宗の代に至つて道教を尊ぶの餘り佛教を排斥し京師の寺院を毀つた。是れ實に佛教に對する大打撃で其の以後清朝の時代となるも朝廷は別に佛教を厚信することなく特に有名なる高宗、乾隆帝の如きは新に寺院を建立することを禁じ男子十六年以下女子四十年以下の者及獨子は僧侶たることを禁じた。かゝれば從來盛大であつた所の諸宗中衰退に歸したの中々に多く之れを我國の徳川時代に各宗の並び盛んなりしに比すると其の間大なる相違を見る。然しな

がら彼の元の時代より盛大を致した喇嘛の一派は幼稚蒙昧なる民間に尊信さるゝこと甚だ大なりとのことである。

(二)道教 元の時には道教は正一教、真大道教及び太乙教の三派に分れ各派とも可なりの信者を有して居た。正一教は張氏を祖とし、真大道教は鄺希誠が元の憲宗より得た宗名である。又太乙教は太乙三元法録の術と稱するものを傳授する所よりして其の名を得た。其の祖は金の道士蕭抱真との事。明に至つて世宗大に道教を尊信し宮中に老子の宮殿を建立し邵元節書に尊號を加へて道教を總管せしめ其の死するや古來未だ前例なき四字の諡を與へて元康榮靖と稱した。之れより道士、動もすれば姦惡なるものを出し爲めに穆宗の惡む所となつて大に抑壓された。然し清に至ても猶盛んに到る所、道觀がある。中にも北京の白雲觀は壯嚴なもので道書三千卷を藏して居る。此等道觀に出入する道士は何れも黃衣黃冠を着し肉食妻帯を爲さないことは佛教徒に同じく或は名山大澤に入つて氣根を修養し或は丹砂を熬煉して練丹と號し之れを服して長生不死を謀り或

は符録によつて魔鬼を避くることを勉むる恰かも我國下等社會のもの、符水の力によつて惡魔病災を除かんとする様なものである。

(三)回教 回教は元の太祖が金を征してより後漸く支那の西部に流行し明清の際に至つて天山南路、甘肅、陝西、山西、直隸など可なり其信徒が出来た。然し回教の支那に於ける勢力は到底佛教及道教とは比較にならぬ。クリスト教の事に付ては前に少し述べたから、こゝには略する。

東洋四千年史終

明治四十年十月五日印刷
明治四十年十月十日發行

東洋四千年史

定價金貳圓五拾錢



著作者

伊賀駒吉郎

發行者

吉岡平助

大阪市東區備後町四丁目七拾八番邸

發行者

大葉久吉

東京市日本橋區本石町三丁目十七番地

印刷者

金子久太郎

神戸市兵庫區湊町二丁目二十六番地

發兌元

大阪市東區備後町四丁目
東京市日本橋區本石町三丁目

寶文館

伊賀駒吉郎氏著

心理學原論

全三冊 上製 上卷 定價金貳拾五圓
中下卷 定價各金貳圓五拾錢
小包郵稅各金貳拾錢

本書上中下巻通じて三千ページの大部、今や全部完結せり。眞に空前の大心理學書たり。著者の筆力に就ては前著感情教育論に於て世既に定評あり。今茲に改々するを要せずと雖も本書は世上有りふれたる心理學の如く斯學問題の一部に詳しくして他部に粗あるが如きことなく凡そ心理學所關の問題は一として著者獨特の健筆によりて論議説明せられざるなし。若し夫れ行文の流暢、比喩引例の豊富、さては著者の卓越なる見識の如きは上中巻を購讀せられたる人士の感歎措く能はざる所、敢て弊館の喋々を待たず、大方の諸君子陸續購讀の榮を賜はらんことを切望に堪はざるなり。

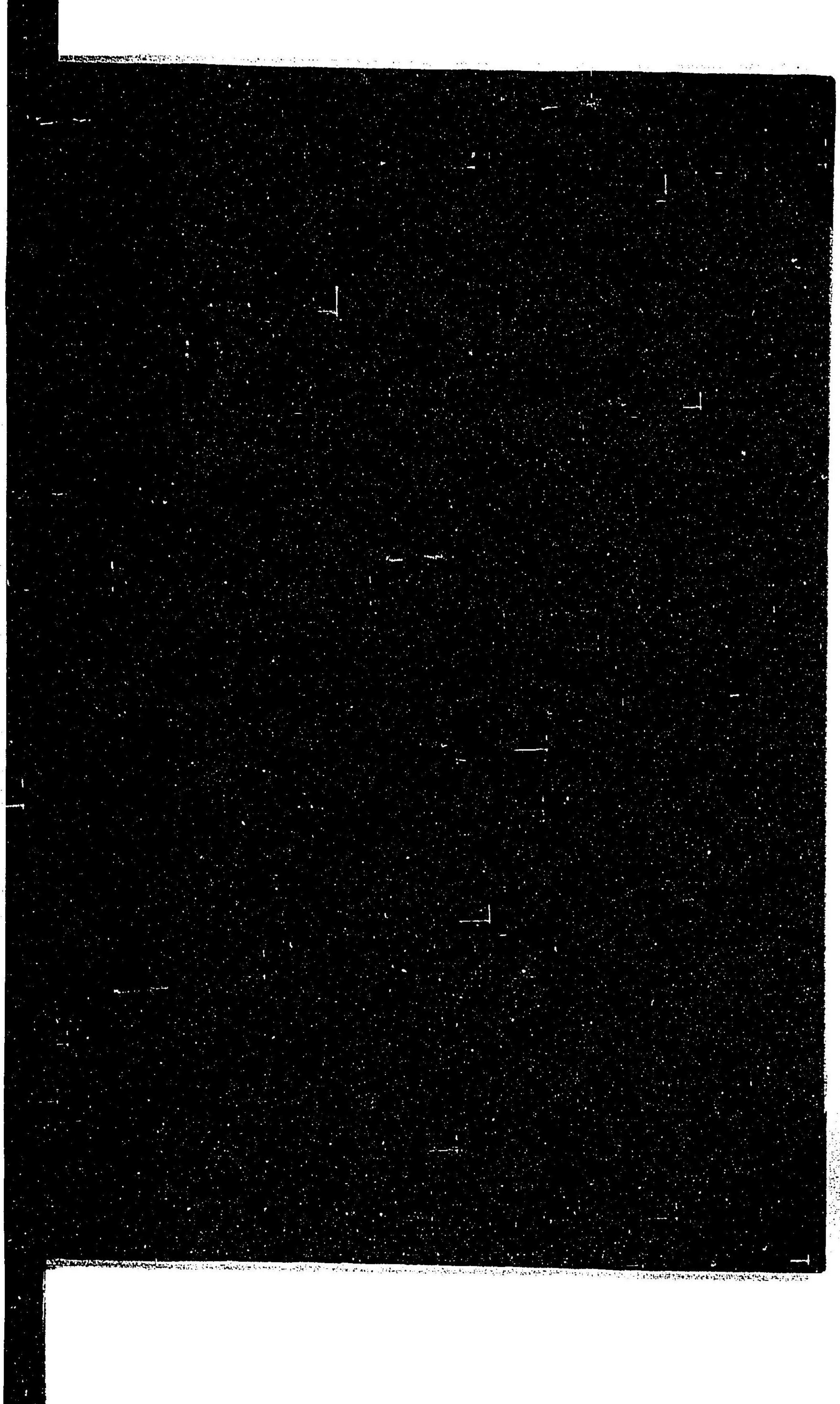
伊賀駒吉郎氏著

心理學要義

全一冊

紙數七百頁
定價金貳圓
小包料金拾五錢

著者先きに心理學原論を著はす、頁數三千、我國空前の大心理學書として好評噴々、然かも初學者に對しては餘りに浩瀚なればとて之れが摘要書を望むもの日々多し是れ本書の出版ある所以なり、本書は著者獨特の流暢なる談話體を以て斯學の要領を論じたるもの、其興味津津たるを、所論の明瞭易解なるを蓋し世上本書の右に出るものあらざる可し、心理學を學ばんとするの諸彦請ふ本書を以て其入門となせ。



003385-000-9

222.01-I137t

東洋四千年史

伊賀 駒吉郎/著

M40

ACC-1906



